

第7回 銀華文学賞発表

銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで七回を重ねることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、ブラジル、フランス、中国など海外から、三八三篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十風勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回は特に歴史小説に優秀な作品が目立ったことから、歴史小説賞を新設させていただきました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は四〇号以降に順次掲載させていただく予定です。御期待ください。

第七回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一一年一月二十三日（日曜日）午後二時より東京の日本出版クラブ会館にて「文芸思潮」エッセイ賞・現代詩賞授賞式などといっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第八回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様様の御応募を心からお待ちしております。

※選考に当たり、森本等氏、都築隆広氏にも多大な御協力をいただきました。

当選

「茜色の軌跡」

高橋惟文（山形県山形市）

河林満賞

「逆光の海」

坂上弘之（熊本県八代市）

優秀賞

「骨肉の町」

冴場 渉（千葉県旭市）

「死んだ男」

丸山 史（大阪府八尾市）

歴史小説賞優秀賞

「小田原征伐余話」

久保協一

（岩手県盛岡市）

「遠足侍」

龍造寺

信（アメリカ・カルフォルニア州）

奨励賞

「チットールガルの残照」

小笠原

新（山形県酒田市）

「雛の記憶」

平沢裕子

（岩手県花巻市）

「美しくない惑いの年」

山本憲明

（福岡県福岡市）

「花見」

有村尚一

（東京都江東区）

「三色もみじ」

鈴木英夫

（東京都小金井市）

「テレビリター―ある異客の喪―」

佐涛崇生（北海道札幌市）

「さようなら『私』」

菅谷春子（千葉県浦安市）

「さきしままる」

柳瀬良行（鹿児島県鹿児島市）

「橋はいずこに」

富田鈴子（愛知県名古屋市）

「風の街」

有森信二（福岡県太宰府市）

「不条理な日々」

原マサコ（千葉県市川市）

「プライド」

待木 啓（兵庫県三木市）

「打つ女―尚子―」

古川サト（神奈川県大和市）

「引き渡し」

神通明美（富山県富山市）

「少年の鏡」

二宮英郷（東京都渋谷区）

「虹の魔窟のブローカー」

李耶シヤンカール（インド・オリッサ州）

読後感がずば抜けて良い

大高雅博



当選作は「茜色の軌跡」高橋惟文に決まった。最終候補として読んだとき、これが当選作と思つた。高橋さんは第一回銀華文学賞で、優秀賞を取っている。それは題材が良かったものの、軽い文体とエンターテインメント的作品というところで、重いテーマの純文学的作品と比べると分が悪かったわけだが、それを今までも貫きとおしてきた。そして、今回は題材ではなく、小説として、前よりも格段に旨くなっている小説の力だけで当選した。軽い文体とエンターテインメント的な作品であり、いつものように読後感がずば抜けて良い。正直に言えば、選考会で推すのは僕一人ではないかと考えていたが、もう一人、強く推す人がいて、決定した。いつものとおり、意見は分かれたが、作品にとっては、そういうものの方が良い場合が多いのも事実である。

僕は、もう一つ、重い内容を持つ物を、合わせて当選作としたらどうかと考えていた。佳作となつた「同行二人」

和泉孜である。「アスベルガー症候群」を主題にした作品で多くの人に読んでいただきたいと思つたのだ。しかし、そのことが、逆に説明的過ぎて、小説になつていないという意見が強く佳作となつた。もう一度、練り直して、再度の挑戦を期待したい。

「死んだ男」丸山史は、結婚はしなかったが、関係が続いてきた男の自殺を巡る話であるが、その距離感のようなのが良い。

「プライド」待木啓、「不条理な日々」原マサコは、それぞれ不可思議な魅力を持った作品で印象的であつた。

「少年の鏡」二宮英郷、「三色もみじ」鈴木英夫は、後は細部の詰めだけだと考える。

問題になつたのは「遠足侍」龍造寺信である。この作品だけではなく、下読みの段階でも、時代物、中国物がありよく調べた作品が多いのだが、評価が難しいのだ。この作品は侍がマラソンをするという、面白い作品なのだが、江戸時代の庶民は、走らなかつた、又は走れなかつたという。だから、飛脚のように、走ることで特別な能力として認められた。では、武士は走つたのだろうか、作品とは別のところで、引つかかつてしまう。時代物などは別で考えるということに僕は賛成である。

話はそれるが、昔、高校の頃、大江健三郎の「万延元年のフットボール」を読んだとき、一番衝撃的だつたことは、

佳作

- 「靖国神社の白い鳩」 鷲尾統一郎 (東京都足立区)
- 「親父のスポットライト」 岡野弘樹 (兵庫県加古川市)
- 「謎つばき女波町」 齋藤澄子 (徳島県鳴戸門市)
- 「二十六夜の月の出」 来の宮あんず (東京都江東区)
- 「黄泉への饓」 峰丘陵一 (奈良県奈良市)
- 「逃げた女」 桜庭チエ (東京都葛飾区)
- 「茜いま増す」 竹内菊世 (徳島県徳島市)
- 「イーストリバー」 矢原繁長 (兵庫県神戸市)
- 「青い屋根の家」 小梢 (東京都世田谷区)
- 「マナグアの恋風」 千葉安雄 (東京都足立区)
- 「同行二人」 和泉 孜 (大阪府東大阪市)
- 「櫓」 武藤蓑子 (東京都多摩市)
- 「赤い車」 小林理樹 (東京都小金井市)
- 「タクラマカンの女」 風吹薫 (愛知県名古屋市中)
- 「波高く、海鳴りきこえる」 吉田はるみ (福岡県福津市)

河林満賞の創設JUNSN

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

だった。封建体制が崩れたのだから、明治になって一揆がおこるのは不思議だったのだ。小説のなかではその回答はなく、長い間疑問に思っていた。最近、江戸の研究が進んでいて（講談社から出ている新しい日本の歴史書など）、どうも、江戸の農民は考えているよりはかなり余裕のある生活をしていたらしい。天保とかの大飢饉は実際に起きて悲惨な現実があったのだが、ある東北の藩では、領民を助けられるほどの米の備蓄があったらしい。ただ、商人に多額の金を借りていて、米はそのために商人に渡さなければならなかった。それは、冷夏による天災ではなく、人災ではないかと言う。結論的に言えば江戸時代の農民の年貢はそれほど高くなかった。明治に入って富国強兵政策のために、農民の税金が高くなりそれで、農民達は一揆を起したのだ。そして、僕達がテレビなどの時代劇ですり込まれている悲惨な農民像は江戸ではなく、大正、昭和初期の頃に近いのではないか、と思う。というわけで、長年の疑問は解消されたのだが、時代劇、時代物については、例えば、その頃の人々の生活を忠実に描くか、または、それらを、現在の問題に置き換え、歴史的なものを歪めてもそのために使うかという疑問は残る。「水戸黄門」に多くの人が共感してきたというのは、現在が余りよいものではなく、勧善懲悪の世界ではないと感じている人が、印籠一つで、正義が実行されるようなそういうものを期待している。

と歴史小説賞優秀賞「遠足侍」である。

高橋惟文氏の「茜色の軌跡」は、四十近くになった独身男性の恋愛の成就譚だが、女性にとつての初恋の相手への一途な思いが、純粹な姿で立ち上がるところに、真つ直ぐな感動がある。このひたむきさや、清らかな姿は、単純であるがゆえに、人間の真性の持つ本来の輝きを開き示してくれる。運命を貫いて信じ切り成就することの、深さと美しさがここにはある。これは逆に一方で我々の日常の猥雑さをも照射してくる。汚れた現実や複雑な社会の軋轢、折り重なってがんじがらめになった現代生活の諸相は、あまりにも幾重にも我々を取り巻き、何かを見えなくしている。希望や夢の成就などはこの世界にはないと諦め、うなだれている。この小説はそれらを鮮やかに切り裂いて、きわめて単純な貫く思いのまぶしい光を我々の奥底に射し込ませてくる。この読後感のよさは、今回の全応募作中傑出したもので、真つ直ぐな快さには、無条件で拍手を送りたい。何度も応募して挫折感も味わっているはずの筆者が、奮起しての快挙である点も、輝きを増している。

いつも歴史小説はいい作品が何篇か応募されてくるが、舞台が現代を離れていると、どうしても注目を集めにくく、最終決定で不利になるケースが多かった。せっかくの優れた歴史小説も他の現代小説と同じように光を浴びてほしいということ、今回他の選考委員と協議し、歴史小説の分

つまり、あくまでも現在の話で、現在の願いとして見ている。作る側も、そういう思いがある。そうすると、時代物というのは、その時代にたくして現在を語るのか、それほど、歴史に忠実ではなくても良いのかというような問題が残る。かなり横道にそれてしまったが、資料を集めるのは必要であるが、それをどういう風に使うかは、微妙な問題、特別に神経を使う所なのだ。

また応募者の健闘を望んでいる。

真つ直ぐな感動

五十嵐 勉



今回の銀華文学賞はこれまでとは異なった色彩を帯びた。上位を占めた作品が、シンプルな明るさを示していたからだ。熟・老年の重く暗いテーマから離れ、希望の色を呈していた。樂觀的と言えば樂觀的だが、しかしその調和的なストーリーの展開は、一つの方向を追う強さにおいて、十分説得性を持つものであり、快い世界を切り開いていた。特にその印象を得たのは、当選作の「茜色の軌跡」

野を特に新設して賞揚することにした。その第一回目の優秀賞として、龍造寺信氏の「遠足侍」と久保協一氏の「小田原征伐余話」が選出された。「遠足侍」は城主の一言で行なわれた「遠足（マラソン）」で、一位、二位を得ようとしていた兄弟が、途中で人助けのためにマラソンを放棄した顛末を軸に描かれているが、人情味に富んだ明るいエンターテインメントは、楽しませてくれる。これもおよそ屈託や苦悩とは遠い、明るい小説で、気持ちのよいテンポで進んでいくストーリーは快適である。さわやかな読後感、やや都合のよい現代性との重なりを持ちながらも清涼さを味わわせてくれる。

「小田原征伐余話」は秀吉の小田原征伐と同時に行なわれた東北の裏の平定事情を素材にした歴史小説だが、重厚な筆致に加え、史実の重さや調べの綿密さではこちらに軍配が上がる。津軽地方の事情によく通じた詳細は見事で、地元の筆者でなければ書けない領域である。津軽家の起こりもよくわかるし、伊達政宗の抑えとした事情もつまびらかにされて、歴史小説を読むことによって過去への知識が深まる妙味も堪能させてくれる。着実な文章は歴史の古色の味わいを深めている。

河林満賞は、坂上弘之氏の「逆光の海」が選ばれたが、行政の組織で働く人間の苦悩が真摯に彫られており、その筆致は誠実な人間性に裏打ちされている。家族の人物が生

きていず、それが全体に効果を減じているが、それを差し引いても真面目な問いかけは胸に迫ってくるものがあつた。この真摯さを買いたい。

冨場渉氏の「骨肉の町」は兄弟の間の溝と憎しみ合いを母親の死を通して描いたものだが、故郷を捨てた主人公の家族内の心理の離反や弟との性格的な違和はよく別出されて、「骨肉の争い」の底に潜む愛憎のドラマを見事に構築している。心理の深さを抉ることでは今回の応募作中抜きん出ていた。ここにはたんに兄と弟という肉親の構造だけでなく、都会と故郷、捨てていくものと捨てられていくものとしての、現代の本質的な社会構造が結果的に象徴されている側面も見逃せない。

裂かれる構造としては、神通明美氏の「引き渡し」も現代の人間関係の法の場合からの亀裂をよく描いていて、その断面の切り取りには鮮やかなものが残つた。地味であるが、氏が経験し、見聞してきた世界の声を継続的に書き表していったほしい。法と人間の間を埋める作業は文学しかできない行為と思う。

今回、外国を舞台にした作品が多かつたことも、全体の明るい色調を助けていた。奨励賞の「虹の魔窟のブローカー」(李耶シャンカール)、「テリビリターある異客の喪」(佐涛崇生)、「少年の鏡」(二宮英郷)、「チットールガルの残照」(小笠原新)、佳作の「タクラマカンの女」(風吹

奨励賞の「さきしままる」(柳瀬良行)は冥界との境目に迷う話で、独特の雰囲気はスリラーとしてぞっと迫つてきた。死の側の呼び寄せはきわめて説得力のあるもので、それは自然界のあちこちにいまも口を開いている普遍的なリアリティを体感させてくれた。私は優秀賞でもよかつたと思つている。

今回は優秀賞と奨励賞、佳作の間の差はほとんどなく、まれに見る混戦で、印象に残る作品、力のある作品がたくさんあつた。その意味では、全体の賑やかな活気は一つのパワーとして熱く渦巻いている。

残念ながら奨励賞にとどまつた古川サト氏の「打つ女―尚子―」の女性主人公も強烈に脳裡に焼き付けられているし、平沢裕子氏の「雛の記憶」も、地味だが、奥行きのあるいい作品と思う。これらは、もつと評価されていい作品である。吉田はるみ氏の「波高く、海鳴り聞こえる」も近く人の潮騒のような生命の引いていく音が聞こえてくる。小林理樹氏の「赤い車」の女性も、原色の車の疾走が鮮やかに胸奥をよぎつた。

これらの賑わいは現今の商業誌には見られない活気で、この方向にそのうちさらに驚嘆するような高峰が出現する期待を抱かせる。間口を広くし、目を凝らしてそれも待ちたい。

薫)、「マナグアの恋風」(千葉安雄)、「イーストリバー」(矢原繁長)などの作品は、インド、イタリア、ブラジル、中央アジア、ニカラグア、アメリカと、全世界に及んでいる。こうした行動や舞台の広がりも、豊かさを示している。どれも個性的であり、その地の色を反映して、多彩な世界像を示していた。これは銀華文学賞にとって歓迎すべき傾向であるし、シルバー世代の展開力・行動力として期待したい領域である。

そのなかの一つ「テリビリターある異客の喪」は、芸術家の奔放な世界の影を引きずる家族の内面劇を、聖職を目指す青年の異国での自殺に重ねて辿るストーリーだが、血みどろの内面劇と合ったバロック調の文体は異色で、明らかに一つの世界を開示している。私は優秀賞に推したが、叶わなかつた。結末が、もつと劇的であれば、はるかに輝きを得ただろうと惜しまれる。

また「チットールガルの残照」は炎の燃え上がる世界に独特な迫力と吸引力があり、書かなければならない内面的な必然性が感じられた。最後の、妻が炎に身を投じるところで、突然の事件としてではなく、内面の情動をしつかり立ち上がらせたなら、より凝縮された結末になつただろう。これも惜しまれた。

「タクラマカンの女」も雰囲気のあるよい小説で、不思議な余韻があつた。

一行にかけける真剣の度合い

小浜清志



人は何故小説を書くのだろうか？
人それぞれの理由があるだろうけれど、わたしの場合は簡単な話、小説を書くことでみんなの注目を浴びたいと言う自己顕示欲であつた。

沖縄の石垣島から高校卒業と同時に上京し、いろいろな職を転々したあげく、わたしは生きることになった。どうやって自分の人生を終えればいいのか。二七歳になつて、たし、子供も二人いた。約半年の間、蓄えて食いつなぎ、どう生きようかと考えた。今から思えばばかな悩みであったが、あの時期を経てわたしは決心をした。一度きりの人生だ、思いきり好きなように生きていこう。そして小説を書こう。その決心がその後の人生の波乱をよんだが、後悔はなかつた。

四、五年で新人賞くらいは獲れると思つていたが、投稿しても投稿してもまつたくかすりもしなかつた。作家になろうと決めて七年がたち三五歳になつた自分がとてつもなく惨めだつた。そして、七年の歳月がすべて徒勞にみえた。もう一年だけ頑張つてみて結果がでなければ潔く夢を捨て

よう。その時から原稿用紙に向かう姿勢が変わった。もう後がないし一年限りである。

その一年に劇的な変化が起き三七歳で文学界新人賞を受賞し二度の芥川賞候補となった。作家としては申し分のない肩書きを得たと感謝している。

劇的な変化とはなんだったのか。振り返ってみれば一行にかける真剣の度合いが深まったことであつた。この文章はだれに見せても恥ずかしくないか、プロの文章になつてゐるか。それまでは書きあげることには目が行き、どうせまだ未熟だという甘えがあつたのだと思う。その甘えを排除してみると、集中方が一気に加速した。ある夜、自分の原稿を読み返して、初めて自分がうまいと感じた。

何十枚書いても気に入らなければ捨てる勇氣も出てきた。過去になかつたことだつた。そして、飛躍的な成長を自分が一番感じ作家になれると確信できるようになつていった。

第七回になる今回も、読んでいて、もう少し注意すれば劇的に変わるのに、と悔やまれる作品が多かつた。

しかし、当選作になつた「茜色の軌跡」は本当に感動したし、うまい作家である。過去に読んだこともあつたが、筆力も冴え、サミーがステージから駆け寄ってくるラストは予想していたが、小説の醍醐味を味わせていただいた。

「死んだ男」は優秀賞を受賞された作品で、二〇年くらい

登場人物にまつた接点はない。あるのは高幡不動の境内にいる人たちというだけであるが、おのおのの視点から同じ風景をとらえていくなかで見えてくる人生模様心が残つた。文革に破綻もなく一気に読み上げた。つぎの作品にまた期待したい。

「雛の記憶」は人口七千人余という東北の過疎の町が舞台である。同級生であつた真澄の兄と結婚し未だに彼女とも一緒に住んでいる。その彼女の心の崩壊を一定の距離をおき淡々と描き、以前榮えていたとき飾られていた雛人形との記憶をからませた傑作である。

「不条理な日々」——不思議な作品である。老婆のつぶやきが軽妙で楽しいと思わせておいて、後半の迷路への入りかたが実に巧妙である。

「花見」——この作品も「骨肉の町」とおなじく近親者との葛藤をえがいたものである。危篤状態の父を病室に残したまま友人と約束していた京都の花見に出かけようとする達郎に姉たちが反対をする。主人公と女の目線とのちがいが作品の興行きを出している。

「チットーラルの残照」——特殊な舞台と異様な物語に引き込まれた。断片的なすじ運びではなく、どこかに細かい描写があつたらよりいい作品になつたのではと悔やまれる。

「美しくない惑いの年」——構成に難があるけれども、障

関係をつづけていた男との回顧であるが赤裸々ともいうべき表現にやささか驚いた。

「わたしのような女を世間では、下半身のだらしない女と決めつけるのでしょうか。三十半ばのわたしは単純に発情していったのです。娘との暮らしを平穩に過ごすために、自分の中に溜まった欲情のガス抜きが必要でした。この時ほど、自分が動物だと実感したことはありませんでした」

女であれ男であれ、ひそかに抱いている欲情をこども明確に書かれると、拍手を送りたくなつた。そして、死んだ男のことを愛情をこめて回顧する主人公に共鳴した。

「骨肉の町」は優秀賞を受賞された作品で、二歳年下の弟との、母の死をめぐる骨肉を描いた内容である。近親者であるが故の愛憎はいたるところで繰り広げられているであろうが、こういう作品としてみせつけられるとやはり身につまされるものである。

「逆光の海」——税をとりたてる者の辛さと悲しみが切実に伝わってくるいい作品だつた。河林満賞を受賞されたが、生前の河林を知る者として、この作品と河林が重なつてみえた。多分、河林ならあまりいい評価をしないと思うが、わたしは、ラストの主人公がさびれた集落に立ちすくむ光景が深く印象に残っている。

以下、奨励賞になられた作品であるが、わたしは「三色もみじ」にいたく感心した。真奈美、武志、英美、という

害者の不安と焦りをきちんと描こうとしている。

「少年の鏡」——兄と妹の関係を軸に、日本から外国までの大胆な旅に羨望を覚えた。

勝手な選評でしたが、これだけの作品が今回も寄せられたことに驚きました。また次回、いろいろな作品に出会えることを楽しみにしています。

物語の效能

小沢美智恵

銀華文学賞も七回目を迎えた。

当選作の高橋惟文「茜色の軌跡」は、エンターテインメント系の作品で、純愛の話である。わたしは甘すぎる気がしたが、満点をつけた選考委員が二人おり、これまで純文学系の作品にばかり賞を与えてきた当文学賞の幅の広さを示すいい機会でもあるという意見に説得されて、受賞に同意した。

賛成してみれば、汚れを知らない主人公二人のさわやかな話で、一種のおとぎ話ではあるが、今の日本にはそのおとぎ話がほしい現実があるのかもしれないと思つた。



たとえばつらい現実を目の前にしたとき、その現実をどうにか受け入れられる形にするのが小説の効能とするなら、この作品の甘さは必要な甘さとして創り出されたともいえるからだ。

丸山史「死んだ男」も、自殺した永年の恋人の死を乗り越えるための物語と読める。甘さはみじんもなく、現実との絶妙な距離の取り方、自己の内面を見つめる目の確かさがみごとで、わたしはすぐれた小説として評価したが、支持しない選者もいて、惜しくも優秀賞にとどまった。

現実を乗り越えるための物語としては、冴場渉「骨肉の町」も当てはまるかもしれない。母の死にまつわる弟との確執を描いてすこみがある。小説の体裁としてどうなのかと問われれば、決して整っているとはいえないのだが、作品の中に、語られるのを待っている怖ろしい物語があるのを確かに感じさせる。

また、エンターテインメント系といえ、龍造寺信「遠足侍」が文句のない出来で、読みやすく、応募作中一番の手練れと思えたが、歴史小説として見るとき、そこに書かれている内容が事実といえるのかどうか疑問を呈する委員がいた。

過不足ない出来という点では、鈴木英夫「三色もみじ」にも触れておきたい。真奈実、武志、英美という三人の登場人物が、ロンドのように、高幡不動という場でそれぞれ

この賞の選考の二週間ほど前、四国徳島の三好市に行ってきた。全国同人雑誌の優秀賞を決める「富士正晴賞」に立ち合い、また我が全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公



開選考会に選考委員として参加してきたのである。風光明媚な大歩危おおほけの渓谷の美しさと、町おこしの懸命さと、そして全国から百数十人の同人誌への思いのある方々が集まり、なかなかの活気が感じられた。人間のエネルギーが高まるのは、まさに人間が密に集結することである——と再認識させられた。

さて、今回の銀華文学賞は、作品提出にお金がかかるようになったせいとか、少し量は減ったものの、内容的にはレベルが上昇してきているのを感じる。

まず当選作は、「遠足侍」だと思った。この方は職業欄に作家と書かれてあった。経歴はよく分からないが、エンターテインメントの大賞を受賞した過去があるようだ。ようやくある意味でプロの文章が参加登場してきたと言える。これは今年からだという歴史部門の優秀賞になった。フィクション的要素がかなりある時代のもの。

小藩である安中藩。江戸の大火のため藩内の杉の木のお蔭でかなりのもうけを得る。しかしそれによって起こった気の緩みを一掃する——という藩主の思いで、一三歳から

の人生を語り、その声が重なり合うことで独特の味わいを引き出している。奨励賞にとどまりはしたが、わたしは薄味ながら佳品だと感じた。

また、他の委員には支持されなかったが、わたしは感心した作品に、鷲尾統一郎「靖国神社の白い鳩」がある。靖国問題というむずかしい題材を、右にも左にも振れることなく注意深く描いた手腕はなかなかのもので、洗脳という問題も深く考えさせる。

その他、菅谷春子「さようなら『私』」、二宮英郷「少年の鏡」、原マサコ「不条理な日々」、佐濤崇生「テリビリタ——ある異客の喪——」、桜庭チエ「逃げた女」がそれぞれ独特な味わいがあつて、印象に残った。

応募された作品を読むと、今さらながら小説は現実のなから生まれまわってくるのだと感じる。つらい現実を、どうにか受け入れられる形に変えて差し出したとき、物語が生まれ、作者はその現実を乗り越えられるのだという気がした。

歴史小説とエンターテインメント

八覚正大

五〇歳までの侍がすべて参加することになる遠足とあし(マラソン)の話。ある兄弟が主人公だが、欠場となればその代わりに金を出さなくてはならないとか、出たからには賞金を狙いたい……といった思惑がいろいろ絡んでくる。マラソン、ロードレース……といってしまうまでもだが、それに参加する者たちの気持ちがよく描かれている。

優勝候補の兄弟は、しかし途中ヨシの茂みの向こうに浮いていた藁舟の中に捨てられた赤子を見つけてしまう。ここからヒューマンな兄弟の誠実さが描かれ、そして赤子の母親が見つかるのである。兄の縁談は壊れるが、しかしその誠実な人柄に家老の娘が惹かれていく……と言う結末。ストーリーだけ書けば「お話」と思われるかもしれない。しかし、これが日本におけるマラソンのルーツでは！と思わせられてしまうし、情を揺さぶるディテールがしっかりと描かれ話の構成が見事だ。

歴史部門の優秀賞もう一作に触れる。「小田原征伐余話」は、小田原征伐に出陣を余儀なくされる、これも小藩の悲しさと勇氣、方略が描かれている。南部と津軽の争いの中、とにかく小勢でかけつける者と、手勢を引き連れては来たが、だいたい遅れての者……と、その違いがよく出ている。

「遠足侍」に比べると、核心に行く前が少し分かりにくい感じもあり、名前や地名の漢字が読みづらくわずらわしい気もするが、よく調べ、そこに臨場感を持たせて描いてあ

ることは評価に値しよう。何より小藩の命運がよく描かれている。

さて、当選作の「茜色の軌跡」は、法学部の学生が、大学の図書館に調べ物に來た中学生の女子と「メモごっこ」を始めた——という過去の回想がある。それも図書館の「法学喫茶室」という本にメモを挟んでの——。夕立せきたてという主人公の名前は面白い。それから時間が経ち、主人公は準教授になる。少女も家族とアメリカへ行き西洋医学史を勉強したりする。やがて美しい女性になり、二人は再会し結ばれるというお話。作者は第一回の銀華文学賞から精力的に作品を出し、エンターテインメント系の作品に秀でている。

今回、二人の選者がそのうまさやエンターテインメント性に徹した感覚を高く評価した。しかし中学生だった少女は、当時「死刑」の問題のレポートを考えていた。その後外国で西洋医学史を学んだ設定にもなっている。それらはどうなってしまったのだろうか……。それらに関係なく、ただ大学生と中学生の出会いがあり秘密の文通があり、そしてやがて二人とも功なり結ばれると——言う——お話。「あしながおじさん」などを連想もしたが、世界は明るく閉じているだけの気がする。第一回の時の「箔押し異聞」の方がはるかに読ませた。それでも様々な細部の工夫は評価したい。

私が読み応えを感じた純文的なものは「花見」と「美し

る。ストーリーまがいにもなりかけるが、ナースの疲れ切った姿に（運よく）気持ちも覚め、そしてキックボードに不自由な足を乗せ、病院のリハビリ・センターをどうだと言わんばかりに——駆け抜けていく主人公の姿は生き生きとしている。人間性の復活がここにある。ユーモアがあり、行き過ぎず人間の裏と表を描いてある。

ただ、私以外の評者は、ナースの視点、医者の視点、そして主人公の視点バラバラであると批判的な見解だった。皆実というリハビリ男性の視点でまとめるか、あるいはナースの視点にした方がやはり読者には分かりやすかつただろう。しかし、ここには医療する側とされる側という、固定された傾斜性に対する人間の反抗と回復への普遍的テーマが見える。だいたい異なるとはいえ、昔見た映画の名作「カッコーの巣の上で」という精神病院の患者たちの反抗とその挫折を思い出した。

以下は、思いついたまま、感想を述べたい。
「少年の鏡」いつも力作の作者だ。ただ、思うに任せてその場を描いていく手法なので、分かりにくさは否めない所もある。それでもいつもはセックスが中心になるが、今回は妹の鬱を治したいというテーマがあり、バンジージャンプへ向かっていくラストなど、ある種感動をもって読めた。

「骨肉の町」かつて場末の女や家族のことなどをどこか

くない惑いの年」の二作だった。前者は父親の最期に臨む姉たちと男性主人公の葛藤である。主人公は仲間とお花見の企画を立てていて、父親を取るか花見へ行くか迷っている。それだけ読むと、親の死に目が近いのに不謹慎だ——と思われる読者もいるだろう。しかし、実は評者はそこに現実のリアリティを感じるのだ。泣きだし非難する姉たち（母親はずっと昔に亡くなっている）のいろいろな思いの吐露もよく描けている。主人公は結局、お花見に行く、そして帰ってきてから父親は逝く……命とは、人間の関係によって変化するようでもあり、しかし寿命とは思いつまとは関係なく自然にあるもののもあり……評者もさまだまな思いの果てに父母を看取っているので、この作品のリアリティが見えたのかもしれない。

一方、「美しくない惑いの年」は、リハビリに励む中高年男の視点からの、ナース、医者たちの医療体制への反抗の「まなざし」である。医学が発達し、医療の水準が上がった現代であるからこそ我々は延命するのだが、しかし対象化され、個人の尊厳・プライドを損なわれていく事実もある。それをクライアントの側から描いたのがこの作品であり、私は高く評価した。ナースの裏と表。医者同士のプライドの投げ合い。医者が医者に送った署名入りの本を主人公は古本屋で見つけ、しかもその中に件の気に入ったナースの手紙が挟まれていた——なんて面白くも作ってあ

ニヒルな男の視点で描き、私は評価していた作者だ。今回は実母の急死と実母と暮らしていた異様な弟の姿を描いている。生々しい感じや弟の病理は伝わるが素材が未消化のまま、何をテーマとしたのかを明確にしてほしかった。タイトルの顔に比べ、身体が未発達の気がした。

「プライド」は、気位の高い女性が、なぜか施設に連れて行かれる話。なんだろうと読んで行くうちに、もうだいぶ認知症の入っていたことが分かる。ラストの社交ダンスの幻想のシーンとどんでん返しがなかなか見事。

「青い屋根の家」お手伝いのサキさんのどこか異様な感じがけっこう描けている。しかし、心を病んだような主人公の理由がいま一つ明確でない気がした。

「打つ女—尚子—」学生時代の仲間と雀荘の話。不思議な女学生。暴力とセックス描写はなかなか。
「死んだ男」死んだ男への思慕を淡々と綴る。その距離を置いた視点が文学になっている。

「不条理な日々」ボケて行く女性の視点からよく描けている。しかし、タイトルのみならずカミュまでを持ち出したところがあまりに意図的。
「橋はいずこに」ある種、姥捨ての話。しかしこの姉妹の少女の優しさ、健気さがいい。そして橋を渡ったお婆さんが、向こうで生きていて逆に飢饉の村を救う設定も悪くない。

「虹の魔窟のブローカー」 旅人の目ではなく生活にまで入って見るインドの様子が描かれている。ブローカーの頭であるアリもよく伝わる。しかし、自殺を企てたアリの妻がよく分からない。

「二十六夜の月の出」 二十六夜に阿弥陀様が見える、というお祖父さんと孫娘との対話。なかなかほのぼのとしている。

「逆光の海」 収納課員の生活。苦しみとヒューマンな点は素直に描けている。

「チットールガルの残照」 旅先の悲劇をうまく伝えていく。

「雛の記憶」 狂っていく夫の妹の様子は描けているとして、この主人公がなぜ覚悟を決めていくのか、そのリアリティが伝わってこなかった。

「黄泉への餞」 ラジコンのヘリコプターを操縦し、孫を殺した暴走族に復讐するというテーマと、その細部の手はずなどよく描けていた。しかし、主人公の怨念はあまり伝わらず、さらに暴走族せん滅への、倫理観のぶっ飛んだ意欲の方が見えて、どこか、あれ、あれ……。

「風の街」 自家中毒、いじめは描けている。迫力もある。ただ、平安初期の葬送の跡の家を建てたから……というの、何をテーマにしたのか分からない。

「櫓」 妻の葬送への素直なレクイエム。



選考会風景

「羽子板」 薄倅な女子との出会いを支えに生きる男性の人生。

「靖国神社の白い鳩」 なかなか難しいテーマに取り組んでいる。しかし、白い鳩のイメージがテーマ未消化なまま終わっている。

「同行二人」 アスベルガーの青年を、お遍路と結びつけたのは面白い。が、その説明に終わり、かつ臭わせた部分も伝わってこない。

現代の矛盾に気付かせ人間性を高く回復させるテーマ、細部にまでみずみずしい感性を注ぎながら、したたかなユーマアとともに感動を湧かせる作品を、さらに読んでみたいと思っている。



文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞 授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様 今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いとしたいと思います。どうぞお気軽にご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十三年一月二十三日(日)

授賞式午後二時より／祝賀会・新年懇親会五時半より

会場●日本出版クラブ会館

東京都新宿区袋町6

TEL03・3267・6111

※JR「飯田橋」駅より神楽坂8分

地下鉄大江戸線「牛込神楽坂」駅A2出口2分

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七 里見・富久田・五十嵐まで

または090・八一七一九七七一まで

第8回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格●2011年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定●400字詰原稿用紙50枚以内（20枚くらいでも可／原稿用紙の場合は必ずA4原稿用紙を使用。B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーを応募するのが望ましい）。※応募審査料1000円をお願いします。

別紙に①応募部門（2011年度第8回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格）⑤〒（ないものは失格）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記入。⑨応募審査料1000円を郵便為替（何も記入しない）で同封。外国からは11USドル。

応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（数名）

奨励賞■賞状・賞メダル

※恐縮ですが応募審査料1000円を御協力ください
ますようお願い申し上げます。

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切●2011年6月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2011年11月末発売の「文芸思潮」43号に発表する。受賞作は2012年1月末発売の「文芸思潮」44号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954茨城県生まれ

千葉大文学部卒

出版社勤務

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽」で千葉文学賞受賞

日本ペンクラブ会員

「消える島」、「後生橋」で芥川賞候補
小説集『火の闇』（集英社）

八寛正大

はっかく まさひろ

1952東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

教師・精神対話士

92「十二階」で新潮新人賞受賞

小説「零度の遊び」「イエロークラスタ」「父のフレーム」「カウンター」ヤルポ『夜光の時計』など

教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

大高雅博

おおたか まさひろ

1954石川県生まれ

日大国文学科卒

80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949年山梨県生まれ

早大文芸科卒

79『流論の島』で群像新人長編小説賞受賞
84-90タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴

「東南アジア通信」「アジアウェーブ」を創刊、編集長

主著に『緑の手紙』（読売新聞インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』（健友館文学賞）他の小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

小浜清志

こはま きよし

1950沖縄県西表島隣の由布島に生まれる

69県立八重山高校卒業と同時に上京

劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める。その後も様々な職を遍歴

87作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める

88「風の河」で第66回文学界新人賞受賞

作家集団「塊」メンバー募集

作家集団「塊」は、文芸思潮および銀華文学賞・まほろば賞などを通じて、新たな表現運動を展開する作家集団です。

河林満の逝去により、欠員が出ましたので、新メンバーを募集します。

「文学界」「群像」「新潮」「すばる」など新人賞またはそれに準ずる受賞経験者で、現在の文学状況を打破したい気鋭の作家の参加を期待しています。

参加を希望の方は「文芸思潮」内・作家集団「塊」事務局に御連絡下さい。地方の作家でも、参加可能です。また受賞歴がなくても「塊」準メンバーとして参加できます。作品・自己紹介文などを送ってください。

連絡先 TEL

03:57067847
090:817119771

五十嵐まで

茜色の軌跡

高橋惟文

ゴールデンウィークが終わった翌日の夕刻、日誠大学法学部の准教授・夕立正和は、地下鉄後楽園駅に隣接する礪川公園れきせんへ向かって歩いていった。講道館前にさしかかった時、小雨が降ってきたが、傘を持たないのでそのまま歩を進めた。顔に当たる雨は温かく、季節は初夏であることを実感させる。

礪川公園の濡れた木々の葉は品の良い緑色である。特に雨が上がった時の若葉の輝きは、公園に生息する野鳥の声にいつそう彩りを添える。公園の階段を上がりきった時、雨は止んだ。正和は濡れたベンチをティッシュで丁寧に拭き、その上にビニールの風呂敷を広げて腰を下ろした。そ

の直後、林立するビルの隙間から夕陽が顔を出して公園内を茜色に染めた。やがて地温が上がり、正和の足元にうっすらと靄ももが立ち籠める。そのような空間に身を置く時、正和は不思議に心が安らぐのだ。

正和は大阪万博の年、一九七〇年に山形県天童市で生まれた。地元の高校を卒業後、上京して日誠大学法学部に入。以来、二十年ほど礪川公園近くの同じアパートに住んでいるから、この界限は目をつぶっても歩けるほどである。学生時代は、空き時間ができるとよくこの公園で本を読んだ。司法試験に挑戦して日々受験勉強に明け暮れたが、現役での合格はならず、卒業後は大学院に進んで受験生活を

続けた。そして、博士課程一年次の秋に合格を果したのである。二年間の司法修習を終えると、日誠大学は正和を刑法の助手に迎えてくれた。司法研修所の教官から検事任官をすすめられたが、熟慮の末、母校での学究生活を選んだのである。その後、助教、講師を経て昨年四月には准教授に昇進した。

正和がビルの陰に消え行く夕陽を眺めていると、突然背後から軽く肩をたたかれた。驚いて振り向くと、大学の同僚で民法教授の徳山久三が立っている。彼は正和よりほぼ一回り年長である。頭に白いものが目立つが、整った顔立ちと長身であることからまだ四十代半ばに見える。正和はベンチの端に体をずらして徳山の席をつくった。ベンチはビニールの風呂敷が不要なほどに乾いている。

徳山は、「セキさんは本当にこの公園が好きなんですね。助手のEくんが、きつとここにいるかもしれないって言うてましたが、まさにどんぴしゃり……。ところで、誰かと待ち合わせですか？」と言いながら正和の隣に腰を下ろした。

「いえ、ただポーっと……」

「ポーっとですか。そういう時って、意外にいい考えが浮かんだりするものです。ところで、セキさんも忙しいんですね。研究室に何度か伺ったんですが、いつもお留守のよううで」

職場で正和は「セキさん」で通っている。それは、夕立せきだてという姓によるものだが、学生の多くは「ゆうだち先生」と呼ぶ。正和はその呼び名を気に入っている。二十年前に死んだ父親がよく「夕立が多い年は豊作になる」と話していたからだ。

「それは申しわけありません。このところ、学生の就職相談につき合っておりまして……」

「セキさんは優しいですね。私も若い頃は学生の面倒をよく見たつもりですが、この年になると、学生は私を当てにしないんです。いや、当てにならないと思うんでしょね」

徳山はメガネを外し、ハンカチでレンズを拭き始めた。

それは彼の「折り入って話がある」時のいつもの仕種である。「ところで、セキさん、結婚する気はありませんか？」

「結婚ですか？」

正和はこの九月で四十歳になる。そろそろ身を固めなければと思うことはあるが、学部の講義やゼミのほかに通信教育部も兼任しているため、結婚を考える心の余裕はなかった。天童の実家では、正和を当てにできないと思ったように、弟夫婦が農業に従事している。

「セキさん、私が言うのもなんですが、結婚していることは男の武器でもあるんです。もちろん、独身で実績をあげている人はおりますから一概にそんなことは言えませんが、でも、結婚すると今までよく見えなかったことがはっきり

見えてきたりするものですよ」

「そうなんですか。でも、ちょっと年をとり過ぎました。間もなく四十ですから」

「いやいや、セキさんはまだ十分に適齢期ですよ。それとも、誰か交際中の方がおられますか？ もしかして、学長の就任祝賀会で親しく話していたあの女性……」

「彼女は刑法学会の仲間です。結婚を語り合うような仲ではありません」

「ということは、あれですね、友達以上恋人未満っていう……」

堅物で通っている徳山の口から不似合いなセリフが飛び出したので、正和は苦笑した。

「徳山先生、そんな言葉、よくご存知ですね」

「私だってそんなことぐらいは知ってますよ。ウチの研究室でも学生がよくそんなことを話してますから。そうそう、二、三日前に女子学生がセキさんのこと、噂してましたよ。『ゆうだちは兄貴以上彼氏未満』って。セキさんのことをあだ名で、しかも敬称略です。居合わせた助教や助手は誰も注意しないんで、私が叱っておきました」

徳山はいつになく饒舌である。時間稼ぎをしているのか、話はなかなか先に進まない。

「先生、結婚のことですが……」

「そうでしたね。余計なことばかり話しちゃいました。実

一文で来院するから治療費が入らないって奥さんがこぼしていました」

正和はそういう医師夫婦の娘なら会ってみたいと思った。徳山も、正和がその気になってきたことに気づいているようだ。

「その娘さん、土曜の晩は上野の不忍池近くでホームレスへの炊き出しを手伝っているそうです。彼女の写真が新聞に大きく載りましてね。今朝、家内から預かってきました。まあ、お見合い写真の代わりってことで」

徳山はバッグを開け、四つに折った新聞を取り出した。それは去年の十二月二十五日付けの毎朝新聞である。徳山が開いたページには、髪の高い面長の女性がアコーディオンを抱えて微笑むカラー写真が載っている。記事の見出しは「故郷に思いを馳せて大合唱」、アコーディオンの女性奏者については、「メグさん」の愛称で慕われているとあるだけで実名は記されていない。

「きれいな人ですね。お名前はメグさん……。でも、このように立派な生き方をなさっている娘さんとなると、私のような人間は果たして先方の期待に応えられるでしょうか？」

「そんなことはご心配なく……。とにかく明るい娘さんでして、それにこの通りの美人です。年はセキさんより六つか七つ下のようですから、三十二、三つてところでしょう」

は、突然こんなこと申しあげてなんですが、セキさん、お見合いしませんか？」

他人の私生活に干渉しないことで知られる徳山である。いかにもバツが悪そうな顔でせつせとメガネのレンズを拭き続ける。

「お見合いですか？」

「はい。近頃は『合コン』が大はやりだそうですが、それだって集団お見合いみたいなものですよ。セキさんはその方がいいですか？」

「とんでもない。私なんか『合コン』に出る年ではありません。ですから、お見合いのお話をいただけるのは本当に有り難いことです」

「そう言ってもらえると私も嬉しいです。実は家内の友達に開業医の奥さんがいますね、お見合いの相手というのは、その一人娘なんですよ」

正和にはこれまで何度か縁談はあったが、その相手は法律事務所や大学の事務職員が多く、医師の娘というのは初めてである。

「開業医なら、ご両親は医者と結婚させたいんじゃないでしょうか」

「いや、その医者はちよつと変わってしまってますね、なんでもアメリカ留学中に大ケガをしたらしく、車イスで患者を診ているそうです。患者はホームレスが多く、ほとんど無

「お名前はメグさんって書いてありますが、メグミさんとか？」

「そう、中山メグミさん。メグミは漢字で……。いま、ちよつと思ひ出せません。実は十日ほど前ですが、メグミさんと母親が一緒にウチに見えたんです。それで、大学のパンプを見せたところ、メグミさんがセキさんの写真を見て、『私、この人知ってる』って言うんですよ」

「私を知ってる……。それ、一体何の写真ですか？」

「准教授と教授の顔写真が載った学部紹介のパンフです」

「どうして私を知ってるんでしょうか？」

「それが、彼女、言わないんですよ。だいたい前に大変お世話になったとだけ」

「お世話って、私が何をお世話したんでしょうか？」

正和のゼミには「中山メグミ」という卒業生はいない。それに、医師の娘となるとますます心当たりはない。

「何度も聞いたんですよ。でも言わないんです。会えばお互いにわかるからって」

「会えばわかる……」

「そうなんです。セキさんの顔写真を見て、『この人、ゆうだちさんだわ』って言うから、いや、夕立と書いて『セキダテ』と読むって教えたから驚いていました」

初対面で正和の苗字「夕立」をセキダテと正確に読める者は少ない。ほとんどが「ゆうだち」と読む。電話帳をめ

くると、「夕立の湯」、「夕立飯店」、「夕立書房」などが載っているが、すべて「ゆうだち」とそのまま読むようだ。「どうも最近忘れっぽくていけません。メグミさんの漢字を思い出せないので、セキさん、四、五日中でけっこうですからメグミさんに会うかどうか返事をいただけませんか。本来なら、彼女の経歴や家族構成を書いたものをお見せしての話ですけど。とにかく、この話はメグミさんもご両親も大乗り気でして」

徳山と中山医師の妻同士は、日誠大学の市民公開講座で知り合ったという。

「家内がウチの大学図書館で調べものをしている時、中山さんと知り合ったって言っていました。私も助手の頃は図書館によく通ったものですが、この数年はほとんどご無沙汰です」

「私もそうです、もう十年以上」

「セキさん、話の途中ですが、これからウチの助手の歓迎会に出なくちゃいけないんで……」

正和は徳山の後ろ姿を目で追いながら、「中山メグミ」という名を何度も呟いた。新聞に載っている写真を食い入るように見つめたが、思い当たる女性はいない。しかし、どこかで会ったことがあるような気がする。

翌朝、正和は朝食を終えると、テーブルの上に東洋新聞の朝刊を広げた。毎朝、すべてのページに目を通した後、

正和は、この句の作者が「夕立」を「めぐみ」と読ませたことに不思議な感動を覚えた。

それから十日ほどして、徳山から「見合いについて早く返事がほしい」と催促の電話が入った。正和は見合いに応募の気にいるが、その前に確認したいことがあった。それは、見合いの相手「中山メグミ」は、もしかすると……とある女性か思い浮かんだのである。本名や素性は知らないが、遠い昔の出来事が正和の脳裡から離れないのだ。

五月最後の土曜日、正和は法学部と道路をはさんで建つ日誠大学図書館へ向かった。そこは大学関係者であること証明するものを示せば誰でも利用できる。蔵書検索コーナーに設置されたパソコンで読みたい本を選び、閲覧申込書に住所・氏名、書名・分類番号・記号を記入し、身分証明書添えて受付に出せば、司書は蔵書室から本を持って来てくれる。そのようなシステムは、本を書架から探し出す手間は省けるものの、類似の本を同時に手にして比較できないのが難点である。

正和は「法学喫茶室」という本の閲覧を申し込んだ。およそ五分後、若い女性司書が戻ってきた。

「お待たせしました。改訂版か再訂版ではだめでしょうか？」

「はい、初版でお願いします」

「東新俳壇」をじっくり読み直すのである。その欄には、土曜を除く毎日、秀作十句が載りそのすべてに選評がつく。正和が司法試験に挑戦していた頃、ある教授が「俳句は『司法試験漬け』になっている頭脳をリフレッシュする」と話していた。それ以来、正和は思考が行き詰まると俳句を詠むことにしている。いまも年に三、四回は東洋新聞に投稿するが、秀句として載ったのは一度だけで、それは七年前の八月だった。

「靖国の杜に二匹の蝉が鳴く 夕立正和」

その選評は「首相の靖国神社参拝をめぐる世情を的確に詠んでいるが、私なら『靖国』に『えいれい（英霊）』とルビを振るだろう」というものだった。正和は、その評に納得したわけではないが、「ルビの妙」を実感したものである。その選者は、漢字に違う読み方のルビを多用すること知られる。今朝もまた例の選者である。

正和は掲載された秀句のうち、特に次の句が気に入った。「豊作の願いを込めて夕立待つ」

選者はこの句をこう評している。

「老人は暖冬を喜ぶだろうが、農村では田植え期に深刻な水不足に悩まされる。したがって夕立は『恵みの雨』なのだ。夕立が来るのをじっと待つ農夫の姿が目には浮かぶようである。『夕立』を『めぐみ』と読ませた作者の感性はなかなかのもの」

「申しわけありません。初版本は本の傷みがひどいため、廃棄しました」

「廃棄！」

正和は悲鳴に近い声をあげた。近くにいた閲覧者がそれに驚いて一斉に正和を見る。

「はい。三月に廃棄本の一覧表を談話室に掲示したんです。欲しい方には差しあげると」

「では、誰かがその本をもらったわけですね」

「いいえ、掲示して一ヶ月過ぎてもその本を欲しいと申し出た人はおりませんでした。それで、神田古書店協会に引き取ってもらったんです」

「どこの店が引き取ったか、わかりませんか？」

「はい、その本の行方までは」

傷みがひどい蔵書を廃棄処分することは正和も理解できるが、少々腹がたった。

「あの本は名著ですよ。戦後のヤミ物資のことや、姦通罪や不敬罪が廃止に至った経緯が詳しく述べてあって……、でも、改訂版や再訂版にはそれが載っていないんです」

「私にそうおっしゃられても……」

「昔の司書さんは、傷んだ本を立派に修繕したものです。死にかけての本が見事に生き返る……、今の司書さんは、傷めば直ちに廃棄するんですか？」

「そういうことは司書が独断で出来ることではありません。」

それに、廃棄処分は本の傷み具合だけでなく、閲覧の頻度も考慮しています。今回廃棄した蔵書は、この二年間で閲覧申し込みが一件もなかったものばかり……」

司書は正和の迫力に半分泣き声になっている。二人のぎくしゃくした会話は奥の事務室に聞こえているようで、年配の女性司書が顔を出した。

「あら、夕立先生じゃありませんか。応接室でコーヒーでもいかがですか？」

彼女は、数年前まで法学部の史料室に勤務していたから正和とは旧知の仲である。若い司書はほっとしたような顔で一礼し、その場を離れた。

「コーヒーはけっこうです。あの本は終戦直後の刊行ですから、廃棄はやむを得なかったのでしょう。興奮してすみませんでした」

「気になさらないでください。三日ほどお待ちいただけるようでしたら、その本の引き取り先を調べてご連絡します」

正和が「法学喫茶室」の初版本に固執したのには理由があるのだ。

日誠大学に入学して間もない五月のある日、大学図書館の玄関で突然セーラー服の少女に声をかけられた。

「お兄さんは日誠の学生さんですよ」

「そうだけど」

「私、付属中の生徒です。読みたい本があつて来たんです

が、生徒手帳を忘れて来たので本を借りられないんです。お兄さんの名前で借りていただけませんか？」

図書館を利用するのは、ほとんどが日誠大学の学生である。付属中の生徒の姿を見かけることはまずない。

「いいよ、何ていう本？」

「『法学喫茶室』です」

「『法学喫茶室』って、あの植杉先生の？」

「誰が書いたか知らないけど、社会の先生がそれを読めて言うんです。中学生でも十分理解できるからって」

「うん、そうかもしれない。その本は大学生が読む法学の入門書なんだ」

「詳しいことは知りませんが、とにかく先生が読めつて言うの」

「法学喫茶室」は、慶安大学法学部教授・植杉正一博士の著作である。判事と検事を歴任した氏が、実務で関った事例をもとに法学を平易な文章で解説した名著として知られる。

正和が「なんで『法学喫茶室』なの？」と聞くと、少女はやや怒った表情を見せた。

「私、私中連の弁論大会に出ることになったんです。先生が勝手に私を選んだの」

「すごいじゃないか。先生に見込まれたんだ」

「とんでもない。ありがた迷惑よ」

少女は、赤いカバンの握り手に付いた人形を手でいじりながらふくれた面である。

「迷惑だなんて思っちゃいけない。先生はきみの才能をお見通しなんだ。それで？」

「七月二十五日まで弁論の原稿を書きあげろって」

「たいへんだね。それで、テーマは？」

「死刑です」

「死刑の何について発表するの？」

「死刑は是非か……。その本には死刑廃止論と肯定論が詳しく載っているって先生が……」

「なるほど。その本は植杉先生お得意の脱線が多いから楽しく読める」

「じゃあ、私でも大丈夫なのね」

「もちろん。僕の名前で借りてあげるから、死刑に関するページを目次で探すといい」

正和は「法学喫茶室」を借りて少女に渡した。

一時間ほどして、少女は正和の机の側に来てメモを手渡した。それには「お兄さん、『極刑』って、どう読むんですか？その意味も教えてください。サミーより」と書いてある。

正和は少女をそばに立たせたまま、メモの余白に次のように「回答」した。

「きよっけい。これ以上ないほどに重い刑罰で、死刑のこと。サミー、頑張れ！ 夕立」

少女は「ユーダチ……」とつぶやいた後、笑みを浮かべた。長い髪を背中まで左右に振りながら、ぴょんぴょん跳ねるように立ち去る後ろ姿は、正和の目に新鮮に映った。

それからおよそ二時間後、少女は再びやって来て正和を談話室へ誘った。

「私、これからピアノのお稽古があるので帰ります。きょうは親切にしてくださいありがとうございます。今度は生徒手帳を忘れないで持って来て自分で借ります。お兄さんに質問することをメモして本に挟んでおくから、時々あの本をめくってちょうだい。メモの裏に答えを書いておいてね。でも、あの若い方の司書さんはだめよ。本を受け取るとすぐにパラパラめくるんだもの。中年のおばさんに返す方が安全ね。あの人、そのまま奥へ持つて行くから」

「わかった。時々『法学喫茶室』をめくればいいんだね。そして、サミーの質問があれば答えを書いて挟んでおく、返す時は若くない方の司書さんに……」

「よろしくお願いします。それにしてもお兄さん、変わった名前ですね、ユーダチさんだなんて」

彼女は夕立を「ゆうだち」とそのまま読んだのだ。

「きみだつて変わってるじゃないか。本当は何ていう名前？」

「だめ、教えない。私のこと、友達はみんなサミーって呼ぶわ。男の子みたいでしょう？ でも、私は気に入ってる

の。そんなことより質問の答えをよろしくお願いします」
大学生と女子中学生がこれから「メモごっこ」を始めようというのである。

それから三日後、正和は大学図書館で「法学喫茶室」を借りた。本を開くと中ほどに水色の薄い用紙が挟んであり、それは女の子特有の丸文字で埋められていた。

「ユータチのお兄さん、約束を守ってくれてありがとう。あれからサミーは、ピアノのお稽古に行く途中で『夕立』にあったの（シクシク）。コンビ二で雨宿りして、お稽古に三十分も遅刻よ。それって、ユータチのお兄さんと親しくなったから？（笑）。さて、本日の質問。『日本の死刑は電気イスじゃなかったのね。それは、ナ、ナント、絞首という方法だったんだわ（怖ァー）』でも、事前にノドの筋肉を鍛えておいて頑張れば『もうけ』ってこと？ そんなところ、よくわからないので教えてください。サミーこと五月雨より」

子どもと大人が同居しているような文章である。少女は自分の名前が「五月雨」なので、サミーと名乗っているようだ。彼女の疑問はすべて「法学喫茶室」に載っているのだが、まだそこまで目を通していないのだろう。正和はメモの裏に次のように回答した。

「死刑は生命を奪う刑罰だから、ノドの筋肉を鍛えて頑張っても、死ぬまで何度もやり直すはず。明治の頃、息を吹

き返した死刑囚がいて、それに立ち会った役人が、一度死刑を執行したのだから、生きているのは『もうけ！』と、粹なばかりいをしたと伝えられています。現在は何度でもやり直すというのが定説です。それはこの本の最後の章、『法学意外史』に詳しく述べています。『死刑の是非』を論じる時、死刑の執行方法も大きな論点の一つでしょう。

ユータチ」

正和は、中一の女生徒に宛てた回答にしては難解な文章と思ったが、そのメモを同じページの奥にきつく挟み込んだ。このような二人の「メモごっこ」は、週に一、二度、六月末まで続いた。顔を合わせることはなくても、清楚な女子中学生とのメモの交換は、都会で一人暮らしの正和の心を十分に癒してくれた。

七月に入るとすぐ「弁論大会の原稿ができたので見てください」とのメモが挟んであった。正和は七月第一週の金曜日、夕方五時に礫川公園のベンチで待つと返事を書いた。原稿に目を通すだけなら図書館でもよかったが、サミーと夕食を共にしたいと思ったのである。しかし、当日は公園で二時間待つてもサミーは来なかった。

翌日、図書館に行くとサミーのメモがあった。それは二日前の日付けである。

「明日は会えなくなりました。アメリカの大学に留学中のお父さんがアパート火災にあって大ケガをしたんです

（シクシク）。明日、お母さんとシカゴへ向かいますが、三、四日ほどで帰ります。話は変わりますが、サミーはユータチのお兄さんのお嫁さんになるって決めました。お母さんは『結婚を考えるのはまだ早い』って笑ってるけど私は本気よ。お兄さんと結婚すると、私の名前は『夕立五月雨』ってなるのね。サミーこと五月雨」

それから十日ほどサミーのメモは途絶えた。もしかしたら、司書がメモを捨てているのではと疑ってみた。たしかにサミーの観察どおり、若い司書は返却本をパラパラめくって確認するが、年配の方は一切点検しない。メモに「再会」したのは七月の中頃だった。

「お久しぶり！ 父がやっと元気になりました。母はもう一週間、父に付き添います。私は期末テストが近いので、昨日一人で成田に帰ってきました。『一人で』っていうのがすごいでしょ？ お兄さんから見てもらうはずだった原稿ですが、父の枕元で何度も書き直しました。父は『ユータチさんとはどんな関係？』って心配するから、『フアンタスティックで、ミステリアスでアカデミックな関係よ』って答えておいたわ（笑）。そこで本題。弁論大会の原稿に目を通していただけませんか？ 今度の土曜日、三時に礫川公園の一番上のベンチで待っています。ユータチのお兄さんへ サミーこと五月雨」

サミーの文章はシカゴへ発つ前よりずっと大人びている。

成長期の少女は、二週間たらずでこんなにも変わるものと正和は不思議だった。

その週の土曜日、正和は礫川公園でサミーと会った。急に大人びてきたサミーの大きな瞳と長い髪、そして丸みを帯びた胸が正和の目にまぶしく映る。二人はベンチに並んで腰をおろし、原稿を一緒に朗読した。

「サミー、すごいよ。『死刑を執行した後に真犯人が現れたら取り返しがつかない』っていう部分、これは死刑廃止論者の決めゼリフだけど、サミーらしい理由づけが素晴らしい」

「ほんとう？ 嬉しいわ。月曜日、先生に出します」

「弁論大会は八月三日午後一時、共立講堂だね。ほくも応援に行く。これから前祝にスパゲッティをご馳走するよ」

二人は公園近くの食堂に入った。サミーは窓から差し込む茜色の夕陽を顔いっぱい浴びてまぶしそうに目を細めた。

正和がサミーに会ったのはそれが最後である。弁論大会の二日前、正和の父が脳溢血で急死したのだ。長男である正和は、喪主として種々の法要、納骨等を執り行い、東京に戻ったのは九月中旬であった。そのうえ、図書館は外壁の修繕工事で休館になっていた。

図書館が閲覧を再開したのは年明けの一月である。サミーのメモは残されていたが、それは八月十日付けだった。

「サミーは明日、アメリカへ発ちます。父は再手術することになりました。母は、父の研究が終わるまで家族一緒に暮らそうと言うので、私は現地の日本人学校に転校します。父の研究は、いつまで続くかわかりません。サミーは現地のハイスクールに入るかも。でも、サミーはユータチのお兄さんのこと、決して忘れません。必ずチャージングな乙女になってお兄さんの前に現れますから、それまで待っていてね。それから、弁論大会ですが、お兄さんのおかげで優勝しました。母も『ユータチ先生』にお礼を申しあげなくてはと、二人でしばらく共立講堂のロビーで待っていました。お兄さんに何か悪いことが起こったのでは……と心配です。私は年に数回は日本に帰ります。その時、『法学喫茶室』にメモを挟んでおきますね。ユータチのお兄さんへ サミーより」

正和が十数年ぶりに日誠大学図書館で「法学喫茶室」を手にする気になったのは、徳山が持ちかけた見合いの相手「中山メグミ」は、サミーではないかと思ったからである。彼女は「サミー」、「五月雨」と名乗ったが、東洋新聞の俳句投稿欄に「夕立」を「めぐみ」と読ませた句があるように、「五月雨」もまた「めぐみ」と読むのではないか……。サミーは父親の職業を明かさなかったが、徳山の話では、アメリカの大学に留学したことがあり、いまは車イス生活だという。サミーの父親はシカゴで火災に遭い、大ケガを

なんでしようね」と聞いてきた。

正和は返答に窮した。中一の女生徒と「メモごっこ」をしていたとはとても言えない。

「いえ、事情なんていうほどのことではありません。あの本は私も持っているんですが、探し出すのが面倒でした。昔、目を見張った本を読み返して原点に戻るのもいいかなと」

正和は、自分の顔が引きつっていることを山根に悟られまいと、いきなり話題を変えた。

「ところで、先日、桜谷大学で学会がありましたね、それが終わってから附属図書館に寄ってみました。私の著書が置いてあるって聞いておりましたので。それ、『刑法判例詳解』っていう面白くない本ですが、どの程度読まれているかは本の傷み具合でわかるんです」

「それで、いかがでしたか？」

「意外でした。けっこう読んでくれるんですね。所々に鉛筆で傍線が引いてあったりして」

「鉛筆で傍線……、それはいけませんね。そういう不心得者はウチの図書館におりません。次回の閲覧にそなえて付箋を貼ったり、メモを挟んでおくことはあっても」

正和はどきっとした。山根が「メモ」を口にしたからである。

山根と別れた正和はその足で徳山研究室を訪ねた。見合

負ったはずである。正和は、遙か二十年前のことを時系列で思い出せることが不思議だった。

正和が図書館を出た直後、若い小柄な男が追いかけてきた。

「夕立先生、『法学喫茶室』の初版本は、当方で行方を調べてご連絡します」

「それは助かります」

「申し遅れましたが、私、山根と申します。先生には学生時代に刑法を教わりました」

山根は太い黒縁のメガネをかけているが、眼は優しく誠実そうに見える。

「そうでしたか。ところで、山根さんのゼミの先生はどんなでしたか？」

「清原教授です、商法の。本当は夕立先生の刑法ゼミに入りたかったのですが、入室試験で撥ねられました……。定員十名入室希望者は五十名以上と激戦でした」

男が手渡した名刺には「日誠大学図書館 蔵書主任・山根三郎」とある。

「先生、よろしかったらコピーでもいかがですか」と山根がしきりにすすめるので、正和は図書館に戻り応接室へ入った。

山根は正和にコピーをすすめながら、「先生が『法学喫茶室』の初版にこだわられるのは、何かご事情がござり

いをすすめられている「メグミ」の漢字を確かめるためである。だが、徳山は不在だった。助手の話では、徳山の恩師に当たる村上名誉教授が沖繩で講演中に心臓発作で倒れたため、村上の妻に付き添って那覇へ向かったという。

それから三日後の昼過ぎ、正和が講義を終えて研究室に戻ると、助手が大学図書館の山根から電話があったことを告げたので、すぐに図書館へ向かった。

「山根さん、毎日お忙しいのに個人的なことでお手を煩わせて申しわけありません」

「先生は本当に謙虚でいらっしゃいますね。私たち事務職員をアゴで使う先生方って、けっこう多いんですよ。○博士の著書を揃えてすぐに持って来い』っていう電話はしょっちゅうですから」

正和は「法学喫茶室」の行方を早く知りたいが、ぐっと我慢して山根の話に聴き入った。

「職員数は年々減らされるし……。ところで、廃棄処分した『法学喫茶室』の行き先ですが、協会の事務局で記録していました」

「それはよかったです。でも、返してもらおうとなると、引き取った本屋さんに気の毒ですよ」

「それは大丈夫です。ちなみに、私がここへ勤めて八年になります、返してくれて頼んで断られたことは今まで一度もありません。それで、先生がお探しの『法学喫茶室』

の初版本ですが、白山通りの古川歴法堂にありました」

「古川歴法堂って、たしか国史と法律の専門店ですよ」

「そうです。私から電話を入れておきましたが、その店主はちよつと難しい男でして、ひよつとするとタダで返却っていうのは無理かもしれません」

「それは当然です。所有権は向こうに移ったわけですから」

「よろしいですか。話は変わりますが、二、三年前にウチの受付で『日誠大の卒業生で、『ゆうだちさん』っていう人を知りませんか？』って尋ねた人がいたそうです。この間、先生がお帰りになってから、司書たちに『夕立先生のお名前は、『ゆうだち』ではなく『せきだて』と読む』って教えたなら、ある司書が『そういえば……』って思い出したらいいんです。その人、とても美しい女性だったと」

「その司書さん、いま、いらつしやいますか？」

「それが、実はその女性司書は、切迫流産のおそれがあるので、昨夜日誠大病院に入院したんです。さつき、家族から電話がありまして、だいぶ落ち着いたから心配なさそうだと」

「それはよかったです。重い本を運んだり、背伸びして書架に本を置いたりしなくちゃいけないから、妊婦さんにとつては重労働なんですよ」

「そんな優しいこと言ってくださるのは、夕立先生のほかにおりませんよ。その司書は、先生のことを以前から存じ

正和は驚いた。確かに価値のある本ではあるが、刊行年や本の傷み具合からして、この業界では高くても千円が相場であろう。正和はこのような駆け引きが苦手である。

「私が五千円と申しあげても、やはり早い者勝ちでしょうか？」

「いえ、ウチの店は創業以来、本をセリにかけるとは致しておりません。夕立先生が売り値はいくらかとお尋ねになりましたので、先様がおっしゃった金額を正直に申しあげただけです」

正和は再度、五千円で買い戻したいと言って頭を下げた。「そこまでおっしゃるのでしたら……、そうですね二千円という事です。実は、先様には売ってもいいような返事をしちゃったものですから、別の本を安く差し上げることにして、先生の二千円はそつちのほうに補填させていただきます」

正和にとって、そのような店の事情はどうでもよいことである。財布から五千円札を取り出して店主に言った。

「お釣りはけっこうです。ご迷惑をおかけしましたので」

「そうですね。では、あり難く頂戴します。そうそう、さつき山根主任さんが、点検と消毒は一切しなくていいとおっしゃったんです。古書には消しゴムのクズや髪の毛が残っていたりするものですから、せめて点検だけでもと申しあげたんですが、一切何もしないでくれと……」

あげているので、『ゆうだちさん』と聞いてピンときたけど、個人情報を使われると先生もお困りだろうと思って、『知らない』って答えたそうです」

正和は思った。「ゆうだち」の消息を尋ねたのはサミーではないかと。互いに素性を明かさなまま消息を絶たが、彼女はその後正和を追っていたのかもしれない。

その日の夕方、正和は神田三崎町の白山通りに建つ古川歴法堂を訪ねた。山根が電話を入れてくれたというが、商いはシビアであるから安心はできない。

店主は複雑な表情で正和を迎えた。

「先ほど山根主任さんがお見えになりました、『法学喫茶室』を確認されました」

正和は、山根の親切な対応に頭の下がる思いだが、同時に「よけいなお世話」の感は否めない。サミーのメモが挟んであるかもしれないのだ。

「古川さん、いま頃返してくれだなんて、申しわけありません。お代はお払いますので」

「それなんですがね……」と、店主は急に渋い顔になった。「実は、山根主任さんから連絡をいただく直前にネットで売りに出してしまったんです。初出本ってことで、すぐに買い手がつかましてね」

「そうでしたか。失礼ですけど、売り値はいかほどで？」

「先様は三千円と……」

正和は、山根の言葉が気になったが、「法学喫茶室」を受け取るとすぐに店を飛び出し、タクシーを拾ってアパートへ向かった。

「法学喫茶室」にサミーのメモは不定期ながら五枚残されていた。いずれも水色の薄い用紙である。本の厚さに違和感が生じないようページの間隔を考慮した挟み方である。「一九九二年十二月二十三日 ユーダチのお兄さん、早いものでアメリカに来て三年目に入りました。日本を離れる時、年に数回は帰国してお兄さんに会いたいと、そう思ったのですが、学校や家のことが色々あつて簡単には……。私、九月にシカゴのP高校に入学しました。お兄さんはもう少して大学を卒業するのかしら。いま高校はクリスマス休暇中。父のリハビリを兼ねて家族三人で帰国中です。サミーは付属中に五ヶ月しか在籍しなかつたけど、アメリカのアパート宛てに日誠大学から校友会員証が郵送されてきました。いま、この会員証を使って『法学喫茶室』を借りています。このメモ、お兄さんに読んでもらえらることを祈っています。サミーこと五月雨」

サミーがこのメモを残した頃、正和は指導教授の勧めもあり大学院へ進むことを決意したのだった。

「一九九五年十二月二十一日 前回の私のメモはそのま

月雨です。五月雨と書いて『めぐみ』と読ませるの。あの頃、本名や住所を名乗らなかつたこと、今すぐ後悔していません。ミステリアスな関係って素敵！ そう思っていたのね。お兄さん、私、もう大学生なんですよ。九月にシカゴのT大学に入学しました。専攻は西洋医学史。お兄さんはいま何をしているのかしら。私が大学を卒業したら、家族で帰国する予定です。いま、大学はクリスマス休暇のため私一人で帰国中。時々、あの時の弁論大会の原稿を読み返したり、礫川公園に行ったりしています。そうそう、お兄さんにスパゲッティをご馳走になった食堂にも行ってきました。 サミーより」

その年、正和は大学院の博士課程に在籍したまま司法試験合格を果たしている。弁論大会、礫川公園、スパゲッティは、いずれも正和の心を癒してくれた出来事である。

「一九九九年十月三十日 私、T大学の西洋医学史コースを首席で卒業したのよ。偉いでしょ。申し遅れましたが、日本には一ヶ月前に家族全員で引き揚げました。自宅は上野公園の近くです。問もなく父は車イスで仕事を始めるようです。私も明日からハローワーク通いです。日誠大学からいただいた校友会員証は、いつも肌身離さず持っています。それ、命より大事なの。それ、ユータチのお兄さんにはわかるかしら。 サミーより」

父親は車イスで仕事、自宅は上野公園の近くと、それは

ルが鳴った。

「徳山です。きょう、村上先生が亡くなりました。ご長男はドイツの留学先から戻るのもう一週間ほどかかるようですので、私はここに残って奥様と火葬に立ち会います」

「それは大変ですね。徳山先生のご心痛、お察し申しあげます。研究室には私から連絡しておきましょうか？」

「そうしていただくとお助かります。私は村上家の親戚方面に連絡をとりますので、大学関係はセキさんから……」

「承知しました。それで、こんな時になんですが、先生にお話いただきましたお見合いの件ですが、中山さんの娘さんに会わせていただきたいと思ひまして」

「それはよかったです。私も気になっていたので。そうそう、メグミさんの名前ですが、漢字で『五月雨』と書くんです。

『五月雨』と書いて『めぐみ』と……、素敵な名前ですよ」

「はい、そう思います。ところで徳山先生、お体のほうは大丈夫ですか？」

「私ですか？ 正直、疲れました。我々の世界って、徒弟社会みたいなものですからね。それで、セキさんのお見合いの日取りですが、どうでしょう、再来週あたりは」

「再来週ですね。はい、私はいつでも」

正和は電話を切った後、「そんなに待てない」と呟いた。サミーは毎週土曜日の夜、上野公園の不忍池付近でホームレスへの炊き出しを手伝っていると徳山は話していた。そ

徳山の話と符合する。サミーが持っている校友会員証は、大学図書館に出入りするための「通行手形」なのだ。

「二〇〇三年三月二十五日 ユータチのお兄さん、私、一年前から池袋にある医事博物館で学芸員をやっています。お兄さんは相変わらず私のメモを読んではないのね。メモの枚数がだんだん増えてきて、司書さんに気づかれないうら。でも、この本には『改訂版』と『再訂版』があるのよ。私たちは『初版』だから安心ね。 サミー」

博物館で白衣を身につけ、来館者に解説するサミーの姿が正和の目に浮かんでくる。当時、「法学喫茶室」は初版本しかなかったが、時を経て「改訂版」、「再訂版」が刊行されたことをサミーは知っているのだ。

「二〇〇七年六月三日 ユータチのお兄さん、図書館の司書さんは全部変わりました。壁の絵も全部。あれから何年経ったのかしら。きょう、私は勇気を出して司書さんに聞きました。「ユータチさんという名前の卒業生を知りませんか？」と。でも、司書さんは『そういう名前の人は知りません』と冷たく…… サミー」

正和は、五枚のメモを何度も繰り返し読んだ。それは、まさに「その後のサミー史」である。山根が歴法堂の店主に「消毒も点検も不要」と告げたのは、正和に宛てたサミーのメモに気付いたからにはかならない。正和がメモを手握ったまま呆然と部屋の壁にもたれていると、電話のベ

こへ行けばサミーに会えるかもしれない。

正和は礫川公園で徳山から受け取った新聞を手にとり、アコーディオンを弾く女性の顔に見入った。当時のサミーとはまるで別人に思えるが、額や口元に昔の面影が残っているような気もする。

六月最後の土曜日、正和は午後六時半にアパートを出て上野へ向かった。バスや地下鉄に乗れば短時間で着くのだが、はやる心と不安が入り混じり、総武線と山手線乗り継ぐ遠回りの経路を選んだ。正和の内なる時計は、サミーの清楚なセーラー服姿の時から止まっている。それはサミーも同じだろう。正和に会って幻滅しないかと、前夜はどのようなことを思い巡らしてほとんど眠れなかった。

正和は上野駅西郷口から不忍池方面に向かって歩いた。まだ日は高い。舗道のアスファルトから発せられる熱気が半袖の腕に伝わってくる。

不忍池に隣接する野外ステージ付近は、コバルト色の腕章を着けたボランティアの男女がプロパンガスのボンベや大鍋の周りで忙しそうに動きまわっているが、その中にサミーがいるかもしれないと思ったら正和の胸の鼓動が急に速くなった。

大鍋の前にホームレスたちが並び始めた。彼らの多くは、上は白いポロシャツ、下は濃い茶や黒系のズボンという出

で立ちで、ちょっと見ただけではホームレスに見えない。正和もまた、グレーのポロシャツに茶系のズボンであるから、彼らのそばにいとホームレスに間違えられそうである。腕章を着けた小柄の若い女性が、「さあ、オジさんも早く並んで！」と言いながら正和の背中を強く押したので、鍋の列に加わる恰好になった。

正和は、サトイモが盛りつけられた発泡スチロール製の容器を受け取り、テーブルから離れたベンチに腰を下ろした。さりげなく辺りを見渡したが、サミーらしき女性は見当たらない。ひそひそ声だったホームレスたちの声がしだいに大きくなってきた。あらためて周囲に目を遣ると、驚いたことに大学図書館の山根主任がボランティアの腕章を着けて動き回っている。

山根は古川歴法堂で「法学喫茶室」のページをめくり、正和に宛てたサミーのメモに気付いたからこそ、「点検も消毒も不要」と店主に告げたのだろう。

山根は、正和と目が合うとすぐに駆け寄って来た。

「まさかこういう所で夕立先生にお会いするとは……」

「山根さん、サトイモをご馳走になったら、つい田舎を思い出しましたよ」

「そういえば、先生は山形のご出身でしたよね。去年、テレビで見ましたよ、『日本一の芋煮会』っていう番組。先生、ホームレスの人たちってけっこう明るいと思いませんか

か？」

「たしかに……、誰も卑屈な態度ではありませんね」「それでいいんですよ。彼らの中には再起の機会を窺っている人も大勢います。最近は夜遅くテントを張って、朝早く撤収する人が多くなりました。彼らなりに気を遣っているんでしよう。だから応援してあげたくて……」

正和は嬉しくなった。サミーも、そういう彼らの生き様に共感しているからこそ協力を惜しまないのだろう。

「山根さんは素晴らしい人ですね。きょうは休日っていうのにこうして……」

「でも、清原教授に叱られました。こういう活動は、特定の政党や宗教団体の活動と思われるからやめなさいって」

「いや、清原先生もここに来れば、感激すると思いますよ。そうそう、申し遅れましたが、お陰様で『法学喫茶室』を無事に回収できました。本当にありがとうございます」

「それはよかったです。あの歴法堂の店主は癖のある人ですからね。すみません、私もいろいろ役割がありますのでまた後ほど」

山根は軽く会釈して正和から離れた。

西の空がしだいに茜色に染まり始めた。サトイモの容器をベンチの側に置き、久しぶりの夕焼け雲に見とれていると、突然「みなさん、素晴らしい夕焼けですよ。今夜も元気に歌いましょう」と、女性の甲高い声がスピーカーから

ら流れた。

いつの間にか大鍋は下ろされ、テーブルはステージに早がわりしている。マイクで叫んだのは、白いワンピース姿の大柄な女性である。その隣で、白の上下ジャージを着た若い女性がアコーディオンを胸に抱えて微笑んでいる。正和はその女性がサミーであることをすぐにわかった。身長はあれから十センチ以上伸びたようだ。髪は中一の頃と変わらず、背の中ほどまで長い。優しげな目は昔と変わらないが、面長だった顔は以前よりふっくらしている。ボランティアの青年が手づくりの歌集を配って歩く。周囲から「この歌、知らねえよ」、「オレ、全部歌えるぜ」などという会話が正和の耳に入ってくる。

歌は「赤とんぼ」から始まり、「ふるさと」と続く。歌をリードする女性は、プロの歌手なのだろうか、表情や身振り手振りは大仰と思えるほどだ。サミーのアコーディオン伴奏はリズムカルで耳に心地よい。当時、彼女はよくピアノのお稽古が……と話していたから、こういうことは得意なのだろう。

歌は「村祭り」、「夏の思い出」と続き、最後の曲「きょうの日はさようなら」になった。

正和は手帳から紙を一枚抜きとり、ボールペンで「サミー、お疲れ様！今夜は『法学喫茶室』と一緒にスパゲッティを食べませんか ユーダチ」と走り書きし、山根の

もとへ走った。

「山根さん、こんな時にたいへん申しわけありませんが、このメモをアコーディオンを弾いている女性に渡していただけないでしょうか？」

「それ、いまでもですか？」

正和は大きくうなずいた。歌が終わるまで待てないのである。

山根はメモを受け取るとステージの後方へ向けて走った。ステージに上がり、アコーディオンを弾いているサミーの耳元で何やら囁いている。「夕立先生からです」と告げているようだ。サミーは演奏を続けながら左手の指にメモを挟んで読んでいる。すぐに満面の笑みを浮かべ、山根が指さす方に視線を向けた。二人の目が合ったその時、夕陽がサミーの全身を鮮やかな茜色に染めた。

万雷の拍手で歌は終わった。サミーはアコーディオンを足もとに置くとすぐにステージから飛び降り、正和に向かつて駆け出した。左手にメモがしっかり握られている。

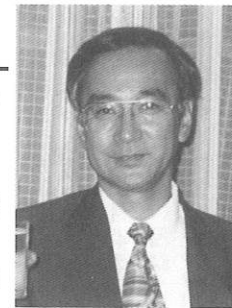
長い髪を左右に振りながら、まるで映画のシーンのようにサミーはぐんぐん近づいて来る。正和の目に映る彼女の全身がしだいに滲みはじめた。

受賞の言葉

高橋惟文

私の二〇一〇年は、実に多くのことが起こりました。まず六月にわが家はシロアリに喰い荒らされ、築四十年にして「落城」しました。当初はリフォームを考えましたが、被害はそれで済むような状態ではなく、建て替えることを余儀なくされました。定年退職から六年経つ身にとって、それは経済的、精神的に大変なことでした。しかし、多岐にわたる業種の職人さんの仕事や、休憩時のお話は「目から鱗」の連続で、小説の「ネタ」には事欠きませんでした。家の建て替えが進む中、今度はクマに遭遇しました。犬を連れて近くの山道を散歩中、二、三十メートル先の藪から突然クマが現れたのです。犬が二度吠えると、クマは面倒そうな素振りでも藪の中へ姿を消しました。そのクマはだいぶ高齢のようで、歩くたびに背中中の左右の筋が浮き出ていました。当地では春からクマの被害が報じられているので、すぐに引き返して警察に通報しました。すると、「警告板を設置したいので現場に案内してほしい」と言うのです。パトカーが迎えに来て私がそれに乗り込む時、大勢の職人さんたちが一斉に私を疑惑の目で見ましたので、その経緯を皆さんに話しましたが、パトカーに乗せられたのは、だいぶ昔にスピード違反で捕まって以来のことです。いま、現地には「注意！クマ出没中」の看板が立っています。

高橋惟文



たかはし これぶみ

- 1945 満州・新京で生まれる
 1968 日本大学法学部卒業
 2005 第1回銀華文学賞・優秀賞「箱押所異聞」
 同年3月山形県立金山高校長を定年退職
 2006 2005年度木村治美エッセイ年間大賞（日本文学館）
 2008 第55回地上文学賞（晩霜の朝）
 2009 4月より山形大学人文学部・非常勤講師（公民科教育法）
 山形市在住
 著書「青い夜風も振りかえる」
 （筆名／牧村希祥／文芸社）
 「残響の四季」（東京図書出版会）

さて、二〇一〇年の最大の出来事は、何といっても銀華文学賞の当選です。第一回で「優秀作品賞」をいただいた後は奨励賞が一度で、創作の限界を感じ始めておりましたが、五十嵐編集長さんや飯田章先生をはじめとする作家集団「塊」の先生方、そして作家の水木亮先生から「いまの作風で頑張れ」と励ましていただきました。今回の受賞は、多くの先生方のご指導のおかげであることを実感しております。まことに有り難うございました。

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙
5

THE ESSAY COSMOS

第6回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第6回エッセイ賞の作品を集めた豊かなエッセイ集

エッセイ宇宙が豊かに広がります

アジア文化社

945円（税込）

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

逆光の海

坂上弘之

ダイニングの電灯は消えていた。残業が続いている。生きていくためには仕方ないと思う。私の指は無意識にその場所に引き込まれるように、壁のスイッチを入れた。眩しいくらい白い蛍光灯が灯る。カバンを床に放り出し、疲れた体を深く椅子にへたり込ませて、ポーツとたたずむ。冷たさが椅子から尻に伝ってくる。ダイニングの空気は、外の冷たさだけがガラス戸を通り抜けてきたように息を白っぽくして、夕食のカレーの残り香を微かに漂わせているだけの冷たい部屋に変わっている。五年前、思い切って新築したときに買ったテーブルの上はめずらしくきれいに片付けられていて、表面にはいく筋もの線を引いたような傷が、過ぎた歳月の軌跡とでもいうように白い蛍光灯の光

に浮かんでいる。帰宅した後、静かなこの空間にしばらく溶け込み、まるで同一化を図ろうとするかのような行動は、ここ最近の習慣になっていた。だがめずらしく今夜は苛立ちがないのが救いだ。天井越しに、床に物が落ちたような音がひとつコツンと響いてくる。二階で中学生の長女が勉強しているのだろう。下の小学生ふたりは眠ってしまったているようだ。家のどこから彼らの甲高い声が漏れてくる気配すらない。私を取り囲む静止した空気は、時間さえも止めてしまっているようだ。私は徐々にその静寂の空気に同化しながら、疲れきった頭と体は真水へと浄化されていく。私にはこの恍惚とでも言うべき時間が必要なのだ。

「あら、遅かったのね」

突然の妻の声と同時に光が目飛び込んでくる。

「ああ」

一日の老廃物を透析しようとしている行為と時間が奪われたようで、私は少し不機嫌になった。

「お風呂、温まったわ。お茶でも飲む？」

妻は濡れた髪をタオルで拭きながら入ってきた。化粧が落とされた顔は、違和感を与えると同時に、何かしら哀れに見えた。お互い四十路に入ったことを考えれば、彼女も同じように私を見ているのかもしれない。

「ああ、頼む。子供達は寝たのか？」

「下のふたりは疲れて寝たみたい。手がかからなくなって、ほんとうらしいわ」

妻はタオルを頭にくるりと巻いて、台所でお茶を入れる準備を始めた。着ているスウェットスーツのうしろ姿も中年女性の趣に変わりつつあるように見える。結婚した頃のままであることのほうが変わるんだ、お互いに。

「由紀は勉強頑張ってるみたいだな」

「頑張ってるみたいだけど、その割には成績が伸びないみたい」

「いいじゃないか。そのうち伸びるさ」

「あら、来年は高校受験よ。そんなのん気なこと言っちゃれないわ」

妻は、そう言いながら慌てたようにして持ってきた急須をテーブルに置くと、電気ポットから湯を注いだ。そして茶棚から湯飲み茶碗を取り出して私と自分の前に置き、向かいの椅子に座ると、肘をついた両腕の両手の中に顔を乗せるようにして私を見つめた。ちょうど人間の顔をのせた置物のように思えて、私は目をそらした。

「毎日大変そうね」

「ああ、しかたないさ」

天井に目をやったまま、ため息のように私が言うと、妻は肘を起してお茶を注いだ。

「はい、どうぞ」

「すまない」

「あなた、寒くない？」

「いや、このくらいがいいんだ」

私はちょうど良い加減の温度が伝わってくる湯飲みを手を持って言った。

「あら、珍しいわね。それ」

私がテーブルの隅に放り出すように置いていた白いレジ袋に妻は目をとめて言った。袋の口からは透明ビニール袋に入った青海苔が覗いている。

「役所に売りに来てたから買って来たんだ」

「粉々に採みほぐして、醤油かけて食べるの、あなた好きよね」

「ああ、明日の朝に食べるよ」

私は何年ぶりだろうかと頭の中で数えてみた。青海苔は黒い緑色を覗かせている。妻は再び両肘をテーブルに立てた。そして、お茶を飲みながら話に付き合っている私を、上目遣いでまじまじと見つめた。私は心の中まで見透かされそうで、少し戸惑いの目を返したが、私自身、妻に見透かされて困ることなど何もないと思うと、照れくさい気持ちで湧いてきて、恋人だったころが遠い昔のように思われた。

「あの頃、一度もらつてきたこと、あつたわよね」

「ああ、あれからもう十年も経つな」

私は当時の頃の自分を思いだしていた。妻は袋を手元に引き寄せ、青海苔の入った透明な袋を手を取った。バサバサと音を立てている透明のビニール袋には「Y市特産青のり」と緑色の文字で書かれてある。裏には生産者の住所と名前などが記された四角いシールが張ってあるはずだ。

「ほら、見てよ。あなたがもらつてきた人と同じ町の人よ。名前は違うみたいだけど」

妻は十年も前のことをよく覚えていたものだと思った。

「昔からあそこの漁師たちが販売してんだ。天日干しだから香りがいいはずだ」

「匂い、嗅いでもいい？」

「開けてみるよ」

に小さく載っただけの市井の事件としか報道されなかった一家心中事件、その事件の真相追及はマスコミでも議会でも取り上げられることなどなかった事件であったが、痛ましくも哀しいその事件こそが、半分以上の職員が一時に入れ替わるという役所内にとつては前代未聞の異動辞令をださなければならなかった最大の理由のはずだった。だが、ほとんどの職員は大異動の理由がその事件と関係しているとわかっていたはずなのに、だれもそれをおもてだつて言つたり、話したりする者はいなかったのだ。私も同じだったが、異動が決まったときの私は、突然薄暗い先の見えないうトンネルの中にも放り込まれて、放り込まれた方の入り口を分厚いコンクリートで固められ、仕方なくただ薄暗い先の出口を目指すしかないような感じだった。

「ねえ、五月の連休はどこか連れてつてよ」

青海苔の袋をテーブルに戻しながら、妻が出し抜けに言った。

「まだ二月だぞ。ずいぶん先のことじゃないか」

今ごろの時期になると毎年のように妻はそんなことを言い出すのだった。今の課に配属になる前のゴールデンウィークは、まだ小さかった子供たちを連れて毎年どこかへ出かけていた。この時期になると毎年妻の言う言葉がそれらしい出させる。

「今年も行かないのね」

私の言葉に妻は微かに口元をほころばせ、空気が充填されて膨らんだ袋の切り口を手でさつと切り開けた。瞬時に磯の香りを含んだ青海苔特有の香りが私の嗅覚をとらえた。

「いい香りね。海にいるみたい」

妻は笑つて言った。

あのとときの、皺が刻まれた婆さんの顔と、無言で魚網の修理をしながら横目でちらつと私を見ていた、真っ黒に日焼けして艶まで失せた婆さんの息子の顔が思い出された。

「あなたも変わったわね」

「当たり前さ。だれだつて変わるさ」

「そんな意味じゃないの……」

「係長になれば、それなりにいろいろあるからな」

妻が言ったことは自分でもわかっている。もう昔の自分とは大きく変わったのだ。だが、それは仕方ないことだと思ふ。時間の経過に従つて雪が徐々に解けていくように、私の中の純粋さや思いやりというものが、ただ解けるだけでなく、解けてどす黒いものに変化してそのまま体中を占領していく気がするのだ。

十年前、私は収納課に配属となった。Y市の税収確保を担うという、はたらく大義をもった仕事ということになつてはいるが、役所内では三Kのひとつに数えられ、敬遠されてきた。私が異動になった年の収納課は、職員の半分強が異動という異常事態だった。前の年に起きた新聞の片隅

妻は私の答えを待つまでも無いといった感じで、そう言った。

「連休はどこも混むからな」

「もし、あなたが四月に異動だったら連れてつてくれる？」

妻の言葉は期待など微塵もないように聞こえた。妻はそう言つた後、自分の鼻の頭を眺めるような目をしていった。

「異動したつて、また新人だからな。おまえ達だけで行つたらいいさ。夏休みは連れて行くよ。去年だつて連れて行つたじゃないか」

「そうね。去年の夏は霧島にキャンプに行つたわね。仕方ないな、ゴールデンウィークは子供たちと長崎の方にも行つてくる」

「ああ、行つてこいよ」

私は椅子から立ち上がった。壁の時計は二十三時を回つたところだった。床に放り出していたカバンを引き上げ、着替えて風呂に入ろうと黙つて寝室へ向かった。妻は私に目をむけることもせず、テーブルに座つていた。

「そのままじゃ、風邪ひくぞ」

私は背中であつてそう言つてダイニングを出た。

「ええ」

三歩ほど廊下を進んだころ、妻の小さな声が背中に聞こえてきた。

*

三月下旬、私の異動内示はなく、当然四月一日付けの異動名簿にも名前はなかった。だががこの課へ異動したとか、だれが昇格したとか、そんな他人ごとのような異動名簿を見るのも嫌気がさす。同期の連中が三、四年の理想的な異動を繰り返している中で、自分だけが取り残されているようで怒りと惨めさが交互にこみ上げてくる。

名簿の中で私の目をとらえた名前があった。収納課を所管する部の部長に、十年前のあの心中事件の黒幕とも言うべき人物が昇格したのだった。それは異動名簿の上から数行目に書かれていて、確か私より十歳年上だからまだ五十二歳、スピード出世の部類にはいる。部長級数名の名前の中で、その名前だけが、そこだけ蛍光ペンが塗られたように異様に浮き出て見えるのは、目の錯覚ではなく、その人と入れ替わりにこの課に異動してきて、十年もの間、偽善的略奪とでもいうべき仕事に携わっていると、あの事件については噂程度の情報しか知らなかった私だったが、仕事上の事案にあぐねたとき、事件の裏に隠された真相をいろいろと想像し考えるようになってきたからなのだろう。浮き出て見えるその名前前で、私の目は動きを止め、これからの一年が今までは何か違うことになりはしないかという不安が、まるで暗雲に覆われた海に釣り出かける朝の漁師の気分を想像させるのだった。

いものとして残っていた。

異動内示を受けた五人のだけれど、ほっとしたように柔らかない笑顔を見せた。毎年、この課を出て行く者が自然と出さずにはいられない笑顔——。今年の私も蚊帳の外だった。出て行く私の係の二人は主任級で、私の両腕のような存在だったが、職員を育てたかと思うと、すぐにどこかの課へ引き抜かれていってしまうことに、もう私は慣れてしまっていた。また育てるのも仕事のうちだと思ってしまう。だが、役所内でも特殊なこの仕事は、だれでも一から指導して育てることはできない。この仕事には、生まれ育ってきた環境や社会との関わり方から確立されてきた各人の考え方が大きく左右するということを私は知りすぎているのだ。残った中に主任の栗田が一人いるが、私とは根本的に異質の人間に思えて、頼りどころを失ったばかりの私は、栗田が異動していった二人の先輩から解放されたように自分の主張を通しかねないと思うと、少なからず不安を抱くのだった。

異動辞令が出た二日後の四月三日、収納課の歓送迎会が催された。課を出て行く者五人と、新しく異動してきた五人が立ち並び、出て行くものから順に一人ずつ挨拶をする。毎年同じようなことが繰り返されてきたのだ。私は挨拶の内容などまったく理解する気はなく、知らない外国語の朗読を聞くように下を向いていた。

私が異動になった十年前の前年度から地方分権推進の環境として、国から地方への税源移譲がなされ、これまで国が徴収していた所得税の税率を引き下げ、その引き下げた分を地方税である住民税に上乘せした。住民税は県民税と市町村民税を合わせたもので、市町村が県民税分も一括して徴収し、徴収した中から県に払い込むという方法をとる。基金も底を尽きかけて再建団体への転落の危機を募らせた県は、その年から市町村の徴税支援という名目で特別チームなるものをこしらえ、県下各市町村の徴税事務に直接的で強制的ともいえる強化策を実施した。地方自治の観点からすれば、県といえども市町村に対して直接的関与はできない。従って彼らが考えた方法は、各市町村の徴税吏員となることであつた。これは各市町村の首長から徴税吏員証の交付を受けることにより、その首長が持つ法に基づいた強制的な徴収事務一切を、何ら首長に何うことなく一職員が行えるという、ある側面からすればとてつもなく大きくて恐ろしい権限を持つということになる。県の支援という名ばかりの強制的圧力は、そのときから今でも続いている。私はこの十年間、彼らと議論して勝つだけの法的知識と経験を自らの努力で積んできていたが、彼らと議論したところで、むなしさだけが残ることに嫌気がさしていた。だが、法的知識と経験を積みばつむほど、私の原点とも言うべきあの漁師町の老婆との関わりは絶対的に揺るぎようがない。

いつの間にか挨拶が終わり、乾杯の音頭がとられた後の少時の沈黙が過ぎ去ると、料亭の畳敷きの部屋は堰をきつたようにざわめきだす。私の係に新しくきた寺山が私をめぐめるようにして横に来て座り、私のグラスにビールを注いで、よろしくお願ひしますとかしこまった言い方で言った。寺山は今度が二課目の異動で、二十八歳の独身だ。

「県の職員たちがいろいろとうるさいようですね」
寺山は出し抜けに言った。事前に情報を仕入れられているかのように思えた。私も彼のグラスにビールを注いだ。すでに寺山の色白の顔は頬紅を顔中に塗ったように変わっていた。

「県の奴らも仕事だからな」

私は否定にも肯定にもとれないような言葉を言った。

「僕が役所に入る前からだそうですね」

「ああ。俺がこの課にくる前の年からだ」

「係長は何年になるんですか、収納課？」

「俺か？ 今年で十一年目突入だ」

私はわざと自慢するような感じで、笑って言った。一瞬私の顔に視線を向ける二、三人の職員顔が横目に入るのがわかったが、私はそのまま寺山を見ていた。

「十一年目ですか？ 僕は高校生でしたよ」

「俺みたいになるなよ」

寺山は笑った。赤い顔が一段と赤く染まった。

「僕は県が収納課の仕事に口出しするなんて許せないんです。異動したばかりで、こんなこと言える立場にないとは思いますが……。すみません」

寺山は私に訴えるように言った。私は寺山の言葉に、単なるプライドからだけではない意気込みのようなものを感じた。

「俺も同じことを思ってる。だけど仕方ないのさ。奴らも仕事だからな。でも収納課の主は俺たちなんだ。奴らが間違ったら奴らの言うとおりにさせない。俺はそうやってきたつもりだ。君もとことん勉強してくれよ」

寺山という男に少なからず期待を感じながら私は言った。「はい、そのつもりです。ですが悪質な滞納者は許せませんね」

寺山の最後の言葉が聞こえたのか、主任の栗田がビール瓶とグラスを持った自分の両手に引きずられるような格好でつかつかと私の前まで来て、白い蛍光灯で黄色く光っている畳の上にとすと尻餅をつくようにあぐらをかいた。

「そうだ。滞納者は許しちゃいけない。おまえ、よくわかってるな」

栗田はすでに酔っていた。寺山はあつげにとられた顔をして栗田を眺めていた。

「そうですね。係長」

栗田はそう言って、私にビールを注いだ。

「ぐらいい悩まないか？」

「すぐに大学出はそう言うんだ。考えすぎですよ」

「そうか。考えすぎか。でも俺たちはマシーンじゃない、人間なんだがな。大学出も何も関係ないと思うがね」

私は栗田を言い伏せることはできたが、折角の新年度のスタートを汚したくなかった。私はやわらかく収める選択をしたつもりだった。栗田もそれ以上食ってかかってはこなかったし、隣にいる寺山にちょっかいを出すこともせず、面白くないと思ったのか、反対側の列にいる職員の方に私に背を向ける格好で座りなおした。

「すこいですね」

寺山が小さな声でささやくように言った。

「なにが？」

「栗田さんですよ。あんなふうには僕もなれるんですかね」
寺山は頭を振りながら話し込んでいる栗田の背中をぼんやりと見ながら言った。

「まあ、この仕事はだれかを手本にすることも大事だが、自分を信じるのが大事な気がする。まずは勉強だ」

「はい……」

寺山は一礼して立ち上がり、課長の席へと移っていった。

「許さないってどういう意味なんだ？」

私はあえてはぐらかした。

「ばんばん差押えることですよ。預金や給料差押えて、それが無い場合は家中を捜索して家財道具を差押えるんですよ。今までやってきてるじゃないですか」

栗田はビールグラスを持ったまま、私を馬鹿にするような言い方で言った。

「滞納者はみんなということか？」

「あたり前ですよ」

栗田とは以前同じような議論をしたことが思い出された。あれは県の職員三名を含めた課内会議で捜索事案を検討しているときだった。担当の栗田が提出した捜索事案に対して、県の奴らは捜索することが当然のような判断を下したのだったが、私が捜索するまでもない事案だと突っぱねた。そのときも栗田は私の意見に口を失らせて反論をぶちまけた。色黒の顔色は変わらないままだったが、目つきだけは私を軽蔑するような目だった。それは、県の奴らが私へ反論を開始したことが追い風となって凄みを増していた。

「おまえ、いつか言ってたよな。夜逃げさせるって」

私は皮肉るように言った。

「ええ、仕方ないでしょう。払わないのが悪いんだから」

栗田は平然とそう言い放った。

「そうだな。払わないのが悪いんだ。でもな、おまえ少し納課の仕事にも緩やかではあるが流れが見え始めていた。

県の奴ら三人も相変わらず毎週火曜日に来て、滞納者宅の捜索に同行し、差押えを強行している。三人のうちひとりだけ異動で代わっているが、今までと全くやり方に変わりはない。この新人県職員も今までのように先輩の県職員から相当な刷り込み教育を受けて、自分の色など出せることなく染まってくのさだろう。私は十年それを見てきた。だが、仕方ないことなのだ。もし県の奴らの足並みが崩れたとしたら、県が市町村に向いて体面をはることはできなくなるのだから。私はもう数年前から相当に無意味だと思う捜索事案以外、あまり中止すべきだと意見することはなくなっていた。また奴らは、預金差押えを何件、給与差押えを何件といったふうに件数までも強要して報告を求めてくるものの、差押えた後の滞納者からの苦情には一切関与することはせず、ほとんど毎日、収納課の仕切りのない部屋からは怒号が飛び、市民が多数訪れている一階中のフロアー全体に響き渡る。私も課員がその対応に追われるのを動物園の檻の中を見るように無数の視線が一気に向けられる。役所の広すぎるくらいの保管室は、昨年からの捜索時に差押えて、公売にかけてみたものの売れ残った家電製品やその他の家財道具などで満杯状態となっていたが、それでも奴らはガラクタ同然の家財の差押えを要求し続けている。奴らの要求に反比例するように戸別訪問が極端におろ

そかになってしまった。滞納者宅を一軒一軒訪問して滞納者と向き合って話をするので、徴収に必要な大事なものを学んだはずだったが、他の市町村との差押え件数の競争という意味のない目標に向けて、課内がざわめきながらもまとまっているように思えて、ここで私ひとりが意固地になつて持論をぶちまけても、一係長の力ではどうにもならないことだというあきらめの気持ちがあるのを抑えにかかっていた。

日々が過ぎていくのに伴って仕事も昨年と同じように流れていくが、その流れをせきとめるように今年もゴールデンスウィークが訪れようとしていた。

妻も仕事をもつていて子供たちも学校があるので、朝はお互いゆっくり話すこともなく家を出る。その夜も帰りが遅くなった私は、いつもどおりダイニングの椅子に深々と座った。新年度に入り、差押えや搜索案件の精査、それにバカみたいに差押えて保管庫の壁さえ見えないほどに積まれた差押え物件の公売の準備やらで、ベテランの職員三人と一緒に毎晩残業する日が続いていた。

「お疲れさま」

私が帰るのを待っていたかのように声が出て、化粧を落とした妻の顔があらわれた。

「ああ、今帰った」

「来週の五月の連休、ハウステンボスへいって来るね！」

「て」

「落ちたらどうする？」

「あなた、心配してくれてるの？」

「ああ、心配するさ。子供も一緒だからな」

「落ちたら死ぬ。そんなこと考えてたら何もできないわ」

「そりゃそうだけど……」

「もし落ちて、あなただけになったらどうする？」

「変なこと言うなよ」

「ひとりで生きていける？」

「生きてはいけるかもしれないけど、今の俺ではなくなるよ」

家族が一瞬で死に、この世からいなくなってしまうことなど一度も考えたことはなかった。私だけがとり残されたら、本当にひとりでこの世の中を生きてゆけるのだろうか。あの事件でただひとりだけ生き残った少年も、今では大人になつてどこかでちゃんと生きているのだろうか。私は十一年前のあの事件の新聞記事のことを思い出していた。

*

五月の連休が来て、妻と子供たちは嬉しさの混じったあわただしい響きのする声在家中に撒き散らして早朝に出て行った。私は布団の中で朝の雀たちの空騒ぎを聞くように、途切れ途切りに聞こえてくるその声をうつろな頭で聞いて

これを言うために、私が帰ってくるまで我慢して待つていたのだと言わんばかりに妻は言った。

「佐世保か？ 少し遠いぞ」

「大丈夫、フェリーで渡ることにしたの」

上機嫌のときに見せるいつもの生意気そうな笑顔で妻は言う。

「どこに泊まるんだ？」

「近くのキャンプ場よ」

「キャンプ場って、キャビンか？」

「貸テントよ。少しでも切り詰めなきゃ」

「待てよ、レジャーに行くのに切り詰めてどうする？」

日頃から変な所で切り詰めたり、安物を買って失敗し、結局また高いものを新しく買い求めることになる妻の習癖、今まで暮らしてきた中で彼女との経験が思い出された。

「だって、あそここのホテル、ものすごく高いのよ」

「いいさ、子供たちも喜ぶだろ。金は俺が出すさ」

「ありがたう。でも、もったいないわ」

高いホテルに泊まるくらいなら、妻はその金でまた別のところへ旅行するだろう。そんな女なのだ。

二日目は隣の佐賀県と呼子に行つてヘリコプターの遊覧飛行を楽しむと妻は言った。

「ヘリコプターに乗れるところがあるのか？ 呼子に」

「ええ、五分で五千円だったかな。子供も一緒に乗れるっ

いた。そして玄関の戸が鈍い音を立てて閉まった途端、何事もなかったような静寂が私を再び眠りに引き込んだ。部屋のカーテンの隙間から差し込む白い光線が顔を撫ぜはじめた頃、やっと起きる気になって寝室をでた。すでに縁側の広い透明の窓からは白い光のカーテンが広縁に降り注いでいた。外はあまりにも好い天気らしく、今年も連休をひとりで過ごすこと決めたはずなのに、なぜか寂しい気持ちになった。

連休初日は午後から本屋に出かけた。小説を買って読む気にはなれず、店内をゆっくりと見て回った。平積みされた文庫本や単行本の表紙は、ちょうど外の太陽が木々の若葉を光らせているように店内の蛍光灯の白い光を浴びて輝いていた。陰鬱なデザインの本が目についた。刑務官についているノンフィクションの単行本だった。目次をさっと見て、中をバラバラとめくったただだったが、それを買って帰った。

翌日の午前中、ダイニングのテーブルの上に放つておいたその本を手にとって読んだ。読み進むにつれて、今の自分の仕事とどことなくダブってくる感覚が、さらに私をそのノンフィクションの中に引きずり込み、昼飯前までに二百ページ余りの活字が私の目を一気に通り抜けていった。私は昼飯など食うことを忘れ、閉じた本の薄暗いプリズンの部屋を描いたような抽象的で陰鬱な表紙を見ながら、い

つもの残業帰り後の浄化作用に身をゆだねるようにしてしばらく固まっていた。

法という絶対的な武器を持たされ、それを行使するように強いられる者——。この武器の使い道をひとつ間違えば、その刃が向けられた者に大きな致命傷を与え、最悪の場合には死に至らしめるはずなのだ。そうなればヤクザと何も変わらないのだ。

娘たちは知っているのだろうか。県の奴らや主任の栗田のように割り切れる人間は、いったいどんな人間なのだろう。四月に部長に昇格したあの男は、十一年前、躊躇の言葉すら目の前に舞い落ちることなく、一瞬の迷いのかけらさえ頭をよぎることはなかったのか。私の仕事はいつたい何なのだろう。私たちはいつたい何を求めているのか。

午後は縁側で昼寝した。隣の敷地に植えられた数本の孟宗竹の若葉をささやかせながら、開け放った窓から顔を撫ぜるように風がはいってくる。うらかな眠りに落ちた私は、一年中で一番さわやかな季節に不釣り合いな夢を見た。

暗雲が覆い尽くした夜の、海の岸壁に私は立っていた。海面はまるで大きな化け物が呼吸する腹のように上下運動を繰り返している。私の背中の遠くには小さな明かりが灯っていて、その光は霧の幕のように海に降り注いでいる。前方には私の年齢の半分ほどの松が立ち並び、その木立に

ぬ間に、棒を持った若い男が煙草を吸っている。小さな赤い点の光が不定期に濃くなるのが見える。私はその棒男の動作ひとつひとつを顕微鏡を見る目で凝視している。男は煙草を投げ捨てた。赤い火の粉が血の匂いのする風に舞う。男は一番右側に正座させられている白いワイシャツ姿の男の前に歩み寄った。何秒かの時間が過ぎたとき、手に持った棒を西瓜を割るように上段に構えた。私の背筋に電気が流れた。が、目は男の振り上げて静止した棒を凝視していた。もうだめだ。その瞬間、私の目は上目で棒男の顔を見た。殺される。止めてくれ。どうして私は殺されなければならぬのか。頼む、やめてくれ、お願いだ。私は棒男の前にひざまずいた囚人の男に成り代わって怯え慄いている。頭に激痛が走る。私の血と脳みそが宙に舞い、辺りに飛び散る。棒男の顔にも黒い血がはねる。瞬間、一部始終を目撃している自分に私は戻っている。棒男が私の気配を感じ、私に振り返る。

私は悲鳴のような声と一緒に脚をぴんと引きつって跳ね起きた。まだ縁側には柔らかな風が入り込んでいた。

五月も終わろうとする頃に毎年あるように、空は灰色に変わり始めた。季節という舞台は、もうすぐ梅雨の幕に変わる気配を見せ始めた。空の色は気分の色を変える——。

隠れた向こう側の暗がりから人の気配が漂ってくる。私はその気配に引きずられて、松の木立を掻き分けた。コンクリート敷きの地面が暗がりにも白く浮かんで見える。硬く

て冷たく見えるコンクリートの上には、正座させられ頭をうな垂れた人間たちが、時代劇の裁きを受ける前の惨めな囚人のようにひざまずいている。それは五人と数えられた。その人間たちの前に、ひ弱な体型をした、まだ年若い男が立ちはだかるように構えている。右腕には暗がりさえも生々しい黒い艶をみせる棒が細い腕に力強く握られている。その男は五人の頭に向かって上から何か言っている。五人のうちの一人が手を合わせて嘆願するように男の顔を見上げて口を動かしているのがわかる。ひと目で異様な雰囲気を感じさせる。私は息を殺して松の木立に身を潜める。何か恐ろしい事態の予感が胸を膨張させる。棒を握り締め、立っている若い男の前方には、体格のいい初老の男の姿が、そこだけ遠くに灯る電灯の光があたっているかのようになり白く浮き立って見える。半そでシャツの先から青黒いものが見える。刺青だとわかる。青黒いまだら模様の本腕がたくましく伸びている。男は突っ立ったまま微動だにせず、棒を持った若い男の行動をただ見守っている。何かが始まるうとしていいる。海は私の背後で音も立てずに大きな呼吸のような上下運動を繰り返している。まるで血の匂いを含んだような潮風がゆるく背中からふいてくる。知ら

だれもが少なからず憂鬱になる季節が招かれざる客のように訪れようとしていた。

そんな頃から新人の寺山の様子に気がなだした。生氣が抜けたような表情に変わっていて、年休の申請が極端に多くなっていた。私の指示した案件の報告も遅れている。

私はしばらく見守るしかなかった。今までも異動してきた新人が見せるひとつの通過点で、私自身が十年前に味わったようなものを彼も感じ始めたのだろうかと思った。

役所の場合、現年度の決算は五月末日で閉まる。三月末日で決算すべきところを支出や収入についての様々な理由から、四月から五月末日までをいわゆる出納整理期間として余裕を持たせるのだ。五月はちょうどこの時期にあたる。税の歳入を一手に引き受ける収納課にとつての五月は、民間企業の営業と同じで毎日のように目標の収納率をクリアできるかどうかのシビアな日が続く。最低限クリアすべき目標収納率を下回れば、ペナルティとして国からの交付金が大幅なカットになるし、それは財政的に貧弱な市町村にとつては相当あてにされた金額なのである。さらには議会での厳しい追及まで覚悟しなければならなくなる。係長になってからの私は、五月連休過ぎからの毎日は、この数字を毎日把握し予測を立てると共に、課長にそのクリアに向けた個々の具体的対策までも進言し、課長に変わって課員に指示を出すこともしばしばであった。

だが、目標取納率は前年に引き続き達成されなかった。六月初め、その数字は確定した。私は仕方ないと思った。そもそも国が定めた数字がどだい無理な数字なのだ。こんなに生き辛い世の中になれば、弱者と規定できるような者がたくさんいる田舎の市にとってはなおさらなのだ。私はそう思った。明日からまた同じことを継続して行くしかない。特効薬など自分達は持ち合わせていないのだから。

目標の取納率をクリアしていれば慰労会が開催されるのだが、今年もなしとなった。私は六月の最初の金曜日、寺山を飲みに誘った。寺山はきよとんととして領いて応えた。「少しは慣れたか？」

私はうつむき加減の寺山に言った。寺山のグラスには、注いだときと変わらない量のビールが小さな泡を上げていた。色白の顔は天井からの光でいっそう白く見えた。

「やっぱ、この仕事は僕には向かないのかもしれない」
「まだ二カ月だぞ。弱音なんか吐くなよ。俺も最初はそうだった」

「え、係長もですか？」
寺山は顔をあげて、私の顔に何かついているのを見るかのように目を見開いて言った。

「あたりまえさ。俺だって同じだったさ。歓送迎会の席で俺が栗田に言ったこと覚えてるだろう？ 少しくらい悩まないのかって」

市長から全権を委任されただけの徴税吏員だからな。そこるところわかっていよな」

ざわめく居酒屋の片隅で、私と寺山のいる場所だけが別世界のようにふと思えた。寺山は注いだままになっていたビールに少しだけ口をつけた。

「寺山、俺たちは役所の中で最強の俗物にならないかやいけいなんだよ。本当はな。江戸時代の徴吏さ。ヤミ金の取立て屋みたいなもんさ。でもなかなか取れない。並みの俗物を超えられない。県の奴らや栗田はその点俺たちと違う。でも彼らのような俗物がいって、俺たちみたいな並の俗物がいるからこそ、取納課の仕事がうまく機能するのかもしれないんだ。俺はそう信じている」

寺山はじつと私を見ていた。
「最強の俗物ですか？ 僕はなれないかもしれません」
「それでいいんだ。両者共存じゃなきゃいけないんだ。絶対にな」

「共存ですか？」
寺山は私がいいたいことがまだわからないようだった。

「法を勉強すればするほど、自分が下した方針が間違っていないのか悩むわけさ。実行にうつした後でさえ夢に出てくることもあるし、休みの日でさえ、ふと思いで出てくる夢になる。俺たちの仕事はそんなもんさ。正解なんてありやしない」

「ええ、覚えてます。でも栗田先輩はそんなこと微塵もないように聞きましたよ」

「そんなことあるもんか。みんなこの仕事をする者は同じさ」

「滞納者の実態というか、収入や家族構成、それに直接家を訪問すれば生活状況が手に取るようにわかってくるんですよ。収入がないのに払えるはずないですよ」

「そんな者たちまで割り切つて、払えるのに払わない者たちと同じように搜索や差押えをしないのか、おまえはそれを悩んでいるんだろう？」

「ええ、まあそうです。これから差押えを何件もしていかなければならないと思うと、辛くなるんです。二カ月しか経ってませんが、もう何件か差押えもしました。これまでやった差押えは、全部そうすべき案件だと判断してやったつもりです。ですが、私の家に電話があったんです。差押えた滞納者のひとりから。親が電話を取ったんですが、今度の職場は大変だと言ってくれました。いやですね、こんなこと。私は独身ですからまだましですが、私が結婚して子供がそんな電話を取つたらと思うと……」

「そんなことがあったのか。気にするなというのは難しいだろう。そんなことがあった時は俺に報告してくれ。俺たちの今の仕事は担当者ひとりで背負うべきものじゃない。課、或いは市役所全体で背負うべきものなんだ。俺たちは

「正解がないんですか？」

「ない。だが正解に限りなく近い答えをみんな導き出さなきゃならない。一人じゃなく、みんなだぞ。法はただその手段を与えてくれるだけにしか過ぎない。俺はそう思う。だから手段だけに頼っちゃいけないと思うんだ。それが表面上は正当な手段だとしてもだ。対象となる者たちの本当の姿を透かして見えるほどに見定めなければならぬと思う。そこで悩むんだよ。俺は」

「ああ、何か僕もわかるような気がします」

「寺山、十年前、俺が取納課にきてまだ担当だったとき、いまでもよく覚えていることがあるんだ。ある滞納者の女がいた。年は五十すぎの独り者だった。滞納してたんで保険証が取り上げられていたんだ。その女、保険証がほしくて保険課の窓口に来たんだが、保険課から俺のところへ相談するようにその女は回されてきた。女は手術が必要な病気だと訴えた。俺の担当地区だったんで、以前からその女の実態調査は終えて、何度かアパートにも訪問していた。その日は滞納額十萬円の二十分の一さえ払う金など持ち合わせていなかった。俺からすれば当然のことに思えたんだが、保険課サイドの規定どおり半分以上の納付がなければ保険証は出せない。俺は女の訴えにその場で悩んだよ。女は今にも泣きそうに訴え続けた。普通は文句を言つて帰つてしまふ滞納者がほとんどなんだが、その女の訴えは俺

の胸をえぐるように響いた。そして女は言ったんだ。病気でここ二、三年ほとんど働けず、生活がぎりぎりだったのだと。俺が以前アパートを訪問したときすでに聞いていたことだった。そして女は最後に言ったんだ。手術が済んだら簡易保険を解約して必ず滞納分を払いに来ますからと手を合わせるような格好で。女の潤んだ目は赤く染まっていた。俺は決心した。信じることを選んだのさ。それから俺は保険課長に掛け合って短期の保険証を何とか交付してもらった。女の言うことが嘘だったら、俺が全部払ってもいいとそのときは思った。保険証をもらった女は、帰り際に俺に何度も頭を下げた。俺はその女の赤らんだ目を信じた。そして自分に言い聞かせたよ。これで良いんだ、俺は間違っていないと」

寺山は私の話の聞き入っていた。そして寺山は言った。

「そのあとどうなったんですか？」

「私はあの時を思い出すように話を続けた。」

「どうなったと思う？」

「その人はちゃんと払いに来た。そうでしょう？」

「そうだ。忘れかけていた頃だった。女は約束どおり保険を解約した金で滞納額を払いにきたのさ。俺は全身に鳥肌が立った。俺の判断は間違っていないかった。女は帰り際、ほそつと言った。あなたに救われたと。じゃなかったら、あの夜自分は死を選んだかもしれないと」

喰らい、私と担当者の寺山に同行を求めて部長室に向かった。部長は収納課が直属の課であることを忘れ、まるで自分には関係ないことだと言わんばかりに口を開いた。

「T党のH議員からSさんの不動産差押えについて先ほど電話があった。課長、どうにかならんかね？」

定年まであと一年となった課長よりもはるかに若く、今年の異動で部長となった彼は、例に漏れず威圧的な言葉づかいを響かせて言った。

「どうにかならないかと言われましても、法的にはどうしようもありませんが……」

「そこを何とか、知恵をだしてだね、きみ……」

私は部長が最後に言った「きみ」という言葉が胸に食い込むような感じで嫌悪し、腹立たしさと同時に職階が違うだけの差がもたらす仕打ちとでも言うべきものが、はるかに年上の課長をいかにも哀れに見せることを不快に感じた。

「はあ……」

「H議員がお待ちだ。すぐに議員室に行つて話を聞いてくれ。よろしく頼むぞ」

部長はそう言った。課長は頭を下げて席を立った。私と寺山もそれに従ったが、部長自身が十年前まで収納課で仕事をし、さらに係長というポストを経験していたではないか、県の奴ら以上に最強の俗物と評されていたではないか、それなのに今、なぜ私たちと一緒に同行しないのか、私は

聞いてくれていた寺山の目は、あのとときの女の目を思い出させた。寺山も何か感じてくれたのだと思った。私は寺山を飲み込んで誘ってよかったと思った。自分自身にとつても——。寺山と別れてきらくネオンの光の中から抜け出すと、昼間灰色の雲に覆われていたはずの空には、薄雲の間から金色の月が淡く輝いていた。

*

七月に入る頃、寺山の表情に生気が戻ってきた。それと正比例するように県の奴らの要求は増していった。この頃になると例年同じようにノルマを課してくる。市にとってのノルマは、奴ら自身のノルマというよりも奴らの勲章なのだ。奴らは指標として数字に表せるものだけを要求しているように思えてならなかった。だが、市としてはそれに反論する理由などない。景気低迷にリンクするように下降していた収納率であったが、ここ二年続けての低下は、たとえ県のやり方自体に効果がないとしても、反論の余地さえ与えてくれなかった。

例年徴収につきものの軽微な事件は必ず何件かは起こるのだが、そんなノルマ達成に翻弄されている中、特記すべき事件とでもいうべきものが起きた。

温度が高めに設定された空調が、額や首筋に汗を滲み出させるほど蒸し暑い日の午後、課長が部長から呼び出しを課長に代わって言ってやりたい気持がこみ上げていたのをやつと抑えた。

H議員は、S氏の不動産差押えをしなければならなかった理由をねちねちと、どうでもいいことを時間をかけて聞いた。私たちの差押え自体に誤りがあったことのひとかけらでもほじくりだしたかったのだ。結局は、H議員がS氏に頼まれて、単に私たちに差押えの解除を求めるのが目的だったのだが、H議員はS氏が納付約束することで解除してくれと頼みにかかった。課長の受け答えにいらいらしていた私は、納付約束だけでは解除はできない、彼は今までもずっとそんな約束を何度も破った常習犯だったこと、彼には納付するに十分な収入があることを堰を切ったようにきつぱりと説明した。H議員は私に不愉快な態度を見せつけたが、そのかいあって、私たちはようやく権力のガスで充満した部屋から解放された。課長は報告のため、ひとり部長室に立ち寄ると言って別れた。私は報告する必要があるものかと内心思った。寺山は何も私に言わなかったが、二階の部長室から階段を下り、一階の奥にある収納課までの通路を、私の一歩うしろをついて来る彼の顔は、夏の早朝のようなすがすがしさをしているのが嬉しかった。

さらに七月も終わる頃、私の係とは別の係員が差押え通告のために滞納者宅を訪問した折、投げつけられた角材が肘に当り怪我を負う事件が起きた。警察に出していた被害

届は、加害者の男が家族や親戚からの再三の説得によって謝罪に来たことで取り下げられ、一応の決着をみたが、汗とノルマにまみれた収納課の夏はまだ始まったばかりだった。

*

県の奴らに勲章をやるだけの件数稼ぎとでもいうべきノルマに振り回されつつも、年は暮れ、新しい年が来た。汗まみれのノルマから凍てつくノルマへと季節は変わったのだ。市の職員でさえ勉強して経験さえ積みめば、県の支援とやらがなくても十分成果をだせるのに、奴らが要求するノルマにただ翻弄させられているようで、私の不愉快さは毎年この時期になると満タン状態に達しようとするのだった。課長も自分で決断するのを自然と避けて、結局県の奴らの言いなり状態で、威厳など微塵も見えず、ただ定年まで穏便に過ごそうとしているのが腹立たしく思えてきていた。

課全体がノルマ件数だけを見て突っ走らされているようでは情けなさがこみ上げてくる。滞納事案検討会議では私と寺山、それに他の係員の市橋だけが、奴らの安易極まりない方針に釘を刺す役目を担っていた。主任の栗田が担当する事案のときに私が苦言を呈すると、彼は罵倒する勢いで私を攻め立てるようになっていた。それならそれで良いと思

一月の半ば過ぎ、搜索すべきの方針が検討会議において全会一致で決定していた寺山の担当する事案で、思いがけない出来事が起きた。搜索する当日の朝になって、課長がだれの耳にもいれずこっそりと部長に相談に行っていたのだ。すぐに部長から私と担当の寺山が呼び出された。私は息を弾ませて部長室に駆け込むと、そこには、てかてかと脂のにじみ出た赤ら顔の部長が待ち構えていて、横には頼りないほどに小さく見える老人のような課長が申し訳なさそうな面持ちで立っていた。

「Kさんの搜索なんかする必要があるのかね、きみ」

部長はぶつきらぼうに私に言った。

「もう三百万円を超えています。何度も交渉していますが、約束は果たせないます。収入はちゃんとあります。よって悪質と判断し、本日搜索して差押えを執行することで検討会議で決定済みです」

私は課長にはばかりか、ことなく声高に言い放った。

「きみ、ちょっと待てよ。Kさんは市に相当貢献いただいでるんだよ。いろんな役も買って出ている。ちゃんとした事業をなさっているじゃないか。体面も考えてやってくれなきゃ困るよ」

部長はまるで自分のことのように臆することなく言ってきた。

「ちょっと待ってください、部長。これをやらなかったら、

今までやってきたことは全部否定されてしまうことになりまますよ。これまで私も無意味な搜索事案には反対して止めて来たつもりです。県の奴らが執行すべきと言った事案でさえです。ですがこれは絶対に止めるべき案件ではない。これこそ悪質なんですよ、部長！」

頭に血が逆流するのが自分でわかった。理論など関係なく、ただ唾を撒き散らしながらも訴えたつもりだった。

私を上目でみている課長には威厳など微塵もなかった。定年前のただの老人に見えた。

「この搜索事案は中止だ。わかったな！」

部長は真っ赤な顔で怒鳴った。そしてしばらくの沈黙の中で、手前の席に座って黙っていた次長がぼそつと言った。

「私も反対だ。今日の搜索は止めてくれ」

その言葉は私をさらに激怒させ、新聞の片隅に載った十一年前のあの事件の引き金となった差押えの執行現場に、まさに私がそこに居合わせたともいうような鮮明な映像が蘇るのを感じた。そして自分はどうなっても構わないという気持ちひたひたと泉のごとく湧き始めると、言わずにはいられない禁断の言葉を発したのだった。

「じゃ、なぜ、部長、あなたは十一年前、あの事件の引き金ともいえる差押えを執行したのですか。あなたはあのときの当事者五人のひとりだった。それも担当係長だった。

搜索現場で担当者は、あの物件の差押えは断固反対したそ

うじゃないですか。でもあなたが命令し、県の奴らはそれに拍手喝采とでもとれる薄ら笑いさえ見せて同意した。担当者は仕方なくその生業の糧といえる物件を身を切るような心境で差押えた。違いますか、部長！ あの人は家族を道ずれに死を選んだんですよ。そしてひとりの少年だけが生き残った。幸か不幸かマスコミも議会もこの件には触れなかった。あなたたちは何事もなかったようにその後も生きて、あなたは今私の前にいる。なにも感じませんか。部長！」

私の放った禁断の言葉は、十一年間の時を経て、部長室にいる私を含めた四人のそれぞれの耳の奥に吸い込まれていった。部長の赤ら顔は青白く変わり果てていった。私の横でいきり立ってもじもじと体を揺すっていたはずの寺山は、柳の木にでも変わったように呆然と立っていた。若い寺山だけが全く知らない事実だったのかもしれない。私は深々と頭を下げて、寺山の腕をつかむと、寺山を先に押し出すように部屋のドアを開けて一緒に退出した。「俺たちの仕事っていったいなんだろうな」と私は独り言のようにつぶやいた。無言で私の一歩後ろをついて来る寺山に聞こえたのかもしれない。寺山が「はい」と言った気がした。

*

日増しに春の気配が強くなり始めていた。年度末の三月

に入るこの時期は、どうしても収納率が気になり始める。一年間の収納課の評価が収納率という単純な割り算で決まるのだ。どんなに多くの家宅捜索や差押えを執行したとしても、どんなに滞納者との交渉で悩み苦しんだとしても、そんなことは意味を持たない。それが私の今の仕事なのだ。そしてこの時期はどうしても異動が気になる。課内でも在課年数が長い職員は、特にそれが気になるのだろう、自然と異動の話が口から出るようになる。確かにこんなヤクザな仕事から一日でも早く足を洗いたいのだろう。私だって同じなのだから。

異動という言葉さえ忘れかけていた時期もあったが、三月二十五日、私に異動内示が来た。課長から内示を言い渡されると、もう私の役目も終わりを迎えたという気持ちでまず先に出て、寂しさがその後を追ってきた。十一年間連続でこの課にいたのは私くらいだろう。今まで聞いたことはなかった。いったい十一年間何を求めて、そして何をやってきたのだろうか。私がやってきたことはどんな意味を持ったのだろうか。事の終わりに感じる心のふくらみのようなものはなかった。それよりも子供のころに悪さや弱いものいじめをしたあとの、ひとりになったときに感じたような後悔を伴った罪悪感がじわりとこみ上げてくるのだった。

私の異動内示を聞きつけた寺山が私のところに来て、「お

世話になりました」としんみりと言った。

内示があった翌日の午後、寺山に頼まれて滞納者の生命保険加入調査のために税務署に同行を求められた。私はそのついでに、日ごろから世話になっていた税務署職員に異動内示があったことを告げ、礼を言った。私の思いがけない異動に職員たちは皆、驚いていた。税務署の職員は私が収納課にいる間にもう三回りは変わってしまった。だが、彼らは定年まで私の在籍した期間の三倍以上を税金という喜ばれざる仕事に没頭するのだろう。数人の滞納者の生命保険を調査した後、寺山が予定していた定期預金の差押えのため銀行へ行き、差押えを完了した。寺山の慣れたやり取りに何も付け加えることはなく、安心して成り行きを見守った。

その後、私は寺山がある場所に誘った。寺山にどうしてもその場所を見せてやりたかった。寺山が運転する車は、河口に続く堤防の狭い道を進んだ。少し開けた窓から微かに磯の香りが入り込んできたとき、前方には淡い青色の海がその姿を見せた。しばらく行くと、数軒の小さな家が寄り添うように建っている集落が見えた。ここは江戸時代までは遠浅の海に浮かぶ小さな島だったことが、家々の裏に襲いかかるように切り立つ岩の崖山と、沖側をぐるりと回りこんで延びる狭い道が想像させてくれる。私は家々の中で一番小さくて生気を失って見える家のすぐ前にある防波

堤の手前に車を止めさせた。防波堤は、まだコンクリートの白い色を残している。車を出ると、潮風が髪を揺らしてきた。海は日ごとに輝きを増し始めた太陽の逆光を浴びて、まぶしい金色の膜を張りながら、途切れることのない光の雫を空に撒き散らしていた。

「きれいですね。ここの海」

背後から寺山が言った。振り返ると、目を細めてゆがんだ顔で海を見ていた。私は白い堤防に座った。寺山もすぐ横にきて腰を下ろした。

「後ろに家があるだろうか？」

私はまぶしく輝く海を見ながら言った。寺山は後ろを振り返った。

「ええ、廃屋みたいですね」

「ああ。住む人間がいなくなると家も死んだようになるな。どうしてだろうな？」

「人が住んでいると、なにかしら役に立っているという意識が家にもあるのかもしれないね。家も人間と同じように意思というか使命みたいなもの、持っているのかもしれない」

「使命か？」

「ええ、使命ですよ。係長だって使命を持って十一年間やってこられたんでしょう？」

寺山の言うとおり、私も使命を持って今までやってきた

のかもしれない。そしてだれもがそうなのだろう。そう言った寺山も同じなのだ。

「十一年前、ここの地区は俺の担当地区のひとつだった。先祖から受け継いだ漁業という生業でみんな暮らしている。穏やかなこの海じゃ収入も限られる。見てみろよ。船だって小さなボロ船ばかりだろう。でもみんな精一杯生きてる。後ろの家には婆さんと五十歳くらいの息子が住んでいた。何でも良いから差押えろと。押さえるものなんて何もないのにさ。預金もない。あるのは借金だけ。それもボロ船の修理や漁具の借金。生活費も事欠くほどの水揚げ。婆さんの月三万円の年金を差押えろとも言うのか。船でも差押えろだと？ 生業の糧の船を押さえてどうする。サラ金から借金させて税金の滞納を埋めさせろとも言うのか？」

「係長？」

寺山の言葉で海のきらめきが目に飛び込んできた。私はハッとした。

「すまん。つい思い出したんだ。俺が収納課になる一年前のあの事件なんてすぐに忘れ去られていたんだよ。俺はそのときそう思ったんだ。何も変わっちゃいないって。でも俺はあの婆さんに教えられたんだ。婆さんは俺に文句ひとつ言わないで、申し訳ありませんと頭を下げて、息子の僅かな売上と自分の年金の中から毎月精一杯の金を手渡すんだ。オレンジ色の白熱電灯がともる玄関先で領収書を書く

俺の手は震えていた。薄暗い庭先で網の修理をしている息子は黙ったまま、日焼けしたどす黒い顔から飛び出たような白い目で何度も俺を見るのを感じた。婆さんは息子が採った売り物の青海苔をくれたことがある。帰り際に強引に俺にくれるんだ。婆さんにはなんの悪意もないことぐらい俺にはわかってた。だから断らなかつた。寒い二月の月が出ている夜だったと今でも覚えている。ちょうど今車を止めてるところが岸壁で、そこには青海苔を天日に干す縄が何本も竹の棒に張ってあったんだ」

止めどなく自然に口から出てくる私の思い出話を、寺山は海を眺めたまま黙って聞いていたが、私が一呼吸入れたのを察知したように聞いてきた。

「その婆さんと息子、いまどうしているんですか？」

「婆さんは五年前から生活保護を受けて老人施設にいる。

息子はその前の年から行方不明さ。十一年前の一年間、俺がやった仕事って、いったいなんだったのだろうな」

「……」

寺山は何も言えず、私の横顔をちらっと見るだけだった。「でも俺にとっては、この場所が、そしてあの婆さんが、原点なんだ。お前の捜索案件で俺が部長とやりあったことあったよな。あの後、お前は何も聞かなかつたよな」

「ええ、僕はあの時、欲送迎会の席で係長が僕に話してくれたことの本当の意味がわかつたんです。だから何も聞く

必要なんてなかつたんです」

「お前に言い忘れたことがある。あの部長、心中事件があった港の岸壁に毎年花を供えに行っているんだと。部長室での件の後、課長がこっそり俺に教えてくれたよ」

「そうですか。それを聞いて少し安心しました。ところで、五人のうちの三人は県職員だったと思います。止めようとした市の若い担当者は？」

「辞めたよ。あの事件の二年後に。俺より役所の二年後輩だったけどな」

「そうですか……」

「この海、それぞれの人間にはどう見えるのかな？」

その独り言のような問いかけに、寺山は何も答えてはくれなかつた。ただそこには生まれたての春の逆光に輝く海がやわらかく広がっているだけだった。

受賞の言葉

坂上弘之

現実なのか、目を疑いました。

受賞通知を開いたときの率直な心境ですが、河林満賞受賞という現実、すぐに喜びの大海をぶつけてきました。前回は三次通過で終わっていただけに、河林満先生を偲ぶ同賞を賜りましたことは、感無量です。

私が小説という文学に魅了されたのは、大学生になってからのことでした。高校まで小説など読まなかつた私のポケットには、いつも文庫本がありました。一時期は暇さえあれば小説を読んでいた記憶があります。ただ、今となつては読んだはずの小説のあらすじさえも覚えていないのですが、あの時の、一瞬の心を揺さぶるような感動、読後の心地よい余韻、或いは打ちのめされたような余韻は、あのときのまま私の体に溶け込んでるように思います。

就職してからは仕事中心で時が過ぎ、子どもが生まれてからは仕事と子どもを軸とした時間が流れていました。が、ふと気が付けば、いつか自分も小説を書きたいという欲求が、まだ私の中に存在し続けていて、そのときの四十四歳という年齢が、その欲求をどうしようもなく強いものに変化させたように思います。そんなとき、この銀華



坂上弘之

さかがみ ひろゆき

- 1963 熊本県八代市に生まれる
大分大学経済学部経済学科卒業
88 八代市役所入庁（現在在職中）
2009 熊本県民文芸賞小説部門第二席受賞
「火灯村」
妻、長女、次女、長男、父、母の7人家族
趣味は釣り、小鳥（カナリヤなど）飼育

文学賞を知りました。応募年齢四十五歳以上。これだと思えました。それが三年前のことです。

今回の受賞作「逆光の海」は、私の仕事に対する原点を書いたつもりです。これからも変わることもなく、忘れることなく、大事にしていくつもりです。そして今後も、自分が生きている証として、喜びとして、この素晴らしい日本語と格闘しながら、創作を続けていけたらと思っています。今回の受賞は、大きな励みとなりました。心から感謝申し上げます。

遠足侍

とおあし

龍造寺 信

「兄じゃ、もつとゆっくり走れ」

と声をかけたのは田川清吉である。長身の兄の名は田川清次郎。先頭を走る若い藩士を兄は負けじと追おうとする。それを短身の弟が引き留める。兄の顔には、お前はうるさいのう、との思いが描かれている。

安中藩士達が城内から走り出たのは安政二年五月十八日の早朝のことである。

季節は春を過ぎ夏に向かおうとしている。寒くもなく暑くもない。梅雨が近いせいかわり気味だ。だが早駆けにはちょうど良い。安中城下の町民達が箆しほを敷いてホラ貝の合図で城門から走り出てくる藩士を見物している。知った顔があると、

十三歳から五十歳までとも漏れて来た。難行苦行をさせることだけが漏れて来たわけではない。

「一番帰りにはいくらかの褒賞金が出る」

との話もあった。それを聞いてブルツと首筋を震わせたのが田川清次郎だった。

清次郎は二石二人扶持の徒士で、ふだんは藩内のいたる所に植えてある杉林の見回り役をしている。母せいと弟清吉の三人暮らしだ。お役の暇な時は弟と碓氷川の河原に出てシジミを取る。畑で作物も作る。百姓と何ら変わりのない生活をしている。

今度の遠足に出たいと言い出したのは弟の清吉であった。しかし、出場規定は十三歳以上、五十歳までである。十二歳の清吉は許可にならないのだ。清吉はがっかりした。ならばと十八歳で出場資格のある兄をこの遠足に出させ一等を取らせようと躍起になった。

「兄じゃ、早駆けは急にはできぬ。ふだんが大切ぞ」

とまるで早駆け師範のような口ぶりである。まだ朝の冷たい頃だった。

「遠足当日まで日にちがある。それまで走る調練をしよう。そうしないと途中でつぶれる。遠足には準備が必要だ」

と言い立てた。

しかし、清次郎にそんな余裕はない。朝は早く仕事に出て、暮れるまで帰れない。空腹で帰ってくる。出されたも

「城代の若様ガンバレ」

「御奉行様、一等」

と口々に叫んで応援している。駆ける藩士達は口をへの字に結び、これからの道中を思って前方を見据えている。目的地は碓氷峠の熊野神社。そこまで七里半。往復するのである。十五里はある。それを今日日没までに果たさなければならぬ。難儀なことである。

安中藩三万石藩主板倉勝明公が「藩士達に大手門より碓氷峠にある熊野神社まで、七里半の遠足を命ぜられるだろう」との話が城中で出たのは安政二年の冬のことであった。

遠足とは長距離の早駆けのことである。続いて年齢は

のは何でも食べる。食べたなら眠ってしまふ。

「調練なしでは途中でつぶれる。とにかく走って走って足をならすことじゃ」

と清吉はそう言っておのれは出場できないかもしれないのに、調練だ、と走り出した。

「うるさい奴じゃのう」

と言いながらも清次郎も仕方なく弟の後を追う。二人で走る姿が見られた。

清次郎にしても足には自信があった。ゆっくり走るのであれば、どこまでも走り通せる自信があった。前に出る藩士がいれば追い抜けば良いだけだ、と高をくくっていた。

弟の清吉はそうではなかった。

「出るからには一番」である。

厳しい調練を始めたのである。裸足で土手を走るのだ。そして一定の速さを保って走り息切れをしない工夫をした。それには息の吸い方と吐き方だと気がついた。二度吸い、二度吐くのだ。これで拍子が取れる。これをどこまでも続けるのだ。

清次郎は清吉の調練に三度に一度はつきあっていた。なるほど清吉の言う通り走るうちに息の吸い方、吐き方が分かって来た。しかも走り始めが一番きつく、しばらく走ると体が流れるように前に出るのを覚えた。

今、清次郎には延び延びになっている縁談がある。祝言が延びたのは、田川家が貧乏であるからだ。嫁取りを半年先に延ばすとまた半年後と延びて来た。今度も、遠足が終わったらと言うことになった。相手は藩内の中農の娘である。小柄で良く働く娘だそう。気が進まぬがこれ以上、母に貧乏で苦勞をかけたくなかった。中農の娘をもらえば食うには困らぬだろう、と思ったからだ。遠足で一番帰りをせしめれば少しは面目が立つかと思つたのも事実だ。しかし、片道七里半はやはり骨だった。

一

遠足の話が最初に起きたのは、年の改まる前の秋のことである。

板倉家五代目当主伊予守勝明公は、安中城、「五月」の間で家老内藤嘉門が漏らす話を聞かれていた。聞き終える小さく舌打ちをされた。

もう一人の家老、吉住甲右衛門が、「登城下城の際に駕籠を使わせてくれ」と言つて来ていたのである。

安中城と家臣の住む屋敷は距離にして半町もない。歩いてもいかほどのこともないであろうに、それを駕籠とはどう言うことだ。しかも直接おのれに言えば良いものを内藤

えず雨露をしのぐには杉板でも小屋を建てなければならぬ。

「杉を江戸に出せ」

と矢のような催促だ。安中は地理的に有利で他の藩より早く杉を江戸に出せた。以来、江戸の材木問屋がひいきにする。いつのまにか吉住甲右衛門等杉奉行の体位がでつぷりと太り出したのである。

勝明公は少々のお目こぼしには寛容だ。ただ単に忠勤だけでは働きがいがないのも御承知である。あまりな賄賂を取るのには許さぬが食い物が良くなるくらいならと目くじらを立てられなかった。しかし、若い家老が駕籠で登下城するのは如何なものかといふ顔はされなかった。

「嘉門、わしに考えがある。ちと灸を据えて、藩内の気のゆるみを一掃するぞ」

勝明公のひらめきは家老の嘉門も一目置いていた。良いひらめきを政策に反映される。それも理詰め一本やりではない。なかなか筋が通り、諧謔もある。城内深くお育ちなのに下々の人情の機微を見る目が備わっている。不思議であつたが、きっとそれは父君の勝尚公の訓育であろう、と嘉門は思つていた。二人とも学者大名と呼ばれるほど学問好きだった。名君は一代ではならない。が、何代も続かない。

嘉門は早く勝明公の考えが聞きたかつた。しかし、深く

嘉門に頼み込んでいる。勝明公はそんなまどろっこしさを嫌われた。

「甲右衛門はいくつじゃ」

「確か、四十歳をいくつか越えたかと」

と嘉門は答えた。

「まだ若いのう。それが駕籠か」

甲右衛門は急に太り出した。若い頃は剣術や馬術にといそしんで、なかなか細身の丈夫者であつた。ところが杉の植林をやらせて成功すると急に太り出した。藩内ではこれを「杉太り」と言う。杉を売つて藩が潤つた。その潤いの上前を杉奉行達のはねて太つているのである。贅沢が下腹につき足腰を弱らせ、今では顎を上げ喘いで歩いている。

もともと杉を植えよと言われたのは勝明公の父板倉勝尚公である。三万石の小大名のささやかな藩財政の改革策であつた。この改革を大事に引き継いだのが勝明公である。

元来、杉は陰地を好めば日當り悪しき所、北請の山の片下り谷の底、湿気深き所などへ植え付けてよし、一日のうち中に二時か三時の間、日が当たれば必ず生育するなりと言われている。それほど杉は日本国土の悪条件を飲んでくれる。一年に一寸の割で成長する。しかも下枝を落とせば新として使える。

この杉が思わぬ余祿を産んだ。江戸の大火である。人の不幸で潤うのはあまり褒めたことではない。だが、とりあ

考えられるのか、その日は黙して語らずの状態が続いた。

翌日、嘉門が登城すると待ちかねたように勝明公が言われた。

「嘉門、遠足じゃ」

「遠足とは何の話でござりまするか」

「早駆けじゃ。藩士の足が衰えておる。鍛えねばならん。

それには早駆けじゃ。遠足じゃ」

嘉門は藩侯の考えがやつと分かつた。甲右衛門の駕籠使用願いを聞いて考えつかれたのだ。名案である。甲右衛門に「駕籠使用はあいならぬ」と言つてしまえば軋轢が生じる。藩士一同に足を鍛えろと言えば家老も徒士も差はない。誰も傷つかない。

さつそく、二人の藩士が呼び出された。

殿が文武両道を提唱された時、藩士の中から二人の師範を選んである。文から山田三川、武から根岸松齡の二人である。二人に藩士の訓育を任せただのである。二人とも良く勝明公に仕え藩士子弟の訓育に当たつていた。

藩士の足の衰えをいち早く察知して二人は、この遠足の話の聞くと膝を打つた。

藩士の足の衰えを何とかしなければ参勤交代時に露呈すると思つていた。江戸への道中、藩士が足腰の弱さで脱落したら、それだけでも恥さらしである。鳥津や毛利の外様

大名は参勤交代時、安中などよりずっと遠方から来る。だが、足腰が萎えて脱落したとの話は聞いたことがなかった。「遠足には何か良い案があるか」

と二人に御下問があった。二人は即座に次のような案を出した。

「山あり谷ありの地形を選んで駆けさせます。この際、速さを競うより、城より出でて城に帰り着くのを本分とすべし。ただし、乗り物は一切使わせてはなりません」

「もちろんじゃ。してどの地を走らせるか」

さっそく二人に、案を煮詰め、どの地域を早駆けさせれば良いか検討させた。やがて二人は案をまとめると登城し、次の二カ所を提示した。一つは浅間山への山道、もう一つが碓氷峠へ至る中山道であった。この二カ所を殿と家老、山田、根岸の四人で協議に入った。

このうち浅間山への山道へ藩士を走らせるのは隣国である高崎藩、前橋藩への示威行為と取られては困るので外された。残るは碓氷峠への中山道だ。

「碓氷峠に熊野神社がある。神社の札をもらって帰らせるのだ」

と勝明公が言われた。

「札が、証拠になりますな」

と家老がうなずいた。

しかし、藩侯が藩士と一緒に走られたのではかなわない。殿に追い抜かれては家来としての面目が立たぬ。追い抜くなら、「お先に御免」とでも言わねばならぬ。これでは氣遣いばかりで遠足にならない。殿の役目は城門で出発の号令と帰ってくる藩士の出迎いで十分だ、と説得して引き下がってもらった。

そんな話を、何か謀はかりごとをしているのではないかと、懐疑の目を向けたのが家老吉住甲右衛門だった。最近、何かこそと密議をこらしているように感じていた。甲右衛門が謀と取ったのも無理はない。この話を事前に甲右衛門にすれば第一に反対するに決まっているからだ。参加者は五十歳まで、途中での乗り物は一切厳禁、違反した者は厳罰に処すとするのであればなおさらである。

ただし、殿は抜け道を造られた。趣旨に賛同する高齢者は石高に応じて冥加金を熊野神社参詣料として出させる。それもすっかりと徴収する。甲右衛門などはきつと参加を渋るに決まっている。ここは綿密にも綿密を重ね謀議を重ねなければならぬ。

「甲右衛門、天神山の杉で江戸に出せるのは何本だ。至急数えてくれ」

と甲右衛門は仕事を仰せつけられ杉林に追いやられた。勝明公は十分に練り上げた上で家臣達に発表するつもり

明け六ツの鐘を合図に城を出て、碓氷峠への中山道をまっすぐ。距離にして七里半。碓氷峠に熊野神社がある。そこまで走れと言うのである。

七里半なら早朝に出て熊野神社まで昼には着く。一休みして帰れば夕暮れには城に帰り着ける。しかし、太平になれた武士にとってこれは容易なことではない。具足をつけさせたら困難はさらに増す。灸を据えるにはちょうど良い。嘉門は殿から話を聞いてさっそく賛同の意をしめた。

これは面白いことになったと思つた。殿はさらに続けて、「歳は五十までにし、病弱者、足を患っている者は外せ。いかに時間がかかっても良いが、途中、馬や駕籠を使った者には腹を切らせる」

と言われた。これは甲右衛門の歳を念頭に置かれたものだ、と嘉門は気がついた。

「家臣だけに走らせて、わしは高みの見物ではしめしがつかぬ。わしも走る。手配をせい」

「殿、それはなりません。一国の主が家来と走るのは負け戦の時だけです。また殿が一緒に走られると、みんなは殿より前には出ませぬ。それでは早駆けになりませぬ」

「そうか。しかし、走りたいのう」

「遠足の間、殿は馬や駕籠を使わず我らの間を走りまくって差配して下さればよろしい」

殿は嘉門の説得に不満そうだった。

だった。しかし、決め事は尻から漏れていた。家臣一同、みんなわくわくしていたのである。

ようよう水のなごむ季節になった。

九十九川と碓氷川に挟まれた城内にも水が匂つてきそうな午後、ついに遠足の触れが出された。しかし、期日は、田植えの終わる五月、梅雨の来る前」とだけあった。

遠足の趣旨は、戦備である。期日を知らせる戦はない。したがって不意に太鼓を打って藩士に招集をかける案であった。

この触れにワツと沸いたのが下級の藩士達で、駕籠や馬などに無縁の者達だ。それだけに足には自信がある。

重臣の者達はおのれらには関係のない話だと思つていた。ところが五十歳以下十三歳まで藩士全員が対象と出たのだ。遠足の距離七里半と聞いて重臣達はげんなりとなった。しかもそれは片道である。とたんににわか病が増えた。登城して来た中級、上級の藩士達は、手ぬぐいを額に当てたり、むやみと扇子を使い、懐に風を送り込んだりするようになった。中には冬に引いた風邪がまだに治らぬとぼやく者が続出した。

遠足の全容が発表され腰を抜かしたのが甲右衛門だった。若い頃ならともかく、歩くのでさえおっくうになった今、

往復十五里もの早駆けだと。とんでもないことだ。ここは奉行所内の若手に走らせることにしようと考えた。ところがだ。

「何分手元不如意の中から遠足をやるのだ。家格に見合ったお助けを願うことになる。欠場となる場合、家老は百両、各頭職は八十両、以下順に賛助金を出してもらおう」

と嘉門が述べると、

「何故の遠足か」と重臣達は口々に不満を言った。しかし、嘉門は、

「戦備えだ」とだけしか言わない。他は一切、黙っていた。

甲右衛門は嘉門をじつと見詰めた。甲右衛門は、頭の悪い男ではない。ここに至って、今までの謀議はおのれの駕籠使用話から出たことだ、と察知したのだ。また場の流れを感じとるに敏な男である。

「みどもも走ろう」

と甲右衛門は下腹をゆすって名乗り出た。裏をかくつもりだった。

「甲右衛門、よくぞ言った。それでこそ板倉家の家老だ」

と殿の声がかかった。この時、甲右衛門は、しまった、と顔をしかめた。殿の策略に引っかけたのだ、と悟った。

足自慢は清次郎兄弟だけではない。他に藩校造士館の若手が日頃の鍛錬振りを披露しようとその日を待っていた。

だ。誠に御苦労でござった」

と代官窪庭は神主曾根の労をねぎらい、

「藩士を碓氷峠まで走らせる。よって峠まで行ったとの証に、到着した藩士に割り札を渡してやってくれぬか」

と頼んだ。割り札にするのは半分を証拠として残すためだ。

話を聞いて曾根は驚いた。熊野神社はふだんは中山道を通る旅人だけのものだ。そこに藩の侍が大挙して走って来るのだ。その趣旨を聞くと大歓迎だった。藩の役に立ちたいと思っていたが、祝詞を上げ天地の安寧を祈るだけの禰宜にとつて藩の役に立てることは知れていた。

「嬉しいこととございます。これより立ち戻って割り札の用意をつかまつりましょう」

と曾根出羽は腰を上げた。

窪庭は遠足の期日が明日に迫っているので、引き留めなかつた。代官屋敷の表まで見送ると空に雨雲が生じているのが見えた。

一刻してにわかにかき曇った。窪庭は人を出して補助し、無事、神社に送り届けようかと思つたが、勝手知つたるは神主の方だろうと雨模様を軽く見た。

代官窪庭が雨に気づいた頃、神主曾根は街道筋で本降り

だが、清吉は、

「兄よ。剣術をやっている連中には腕力はありませんが、長く走る力はありません。きつと彼らは城門を出るとスッ飛ばしにかかります。そんなもの一里ももちますまい」

と兄、清次郎に分析して見せた。

「なぜ分かる」

「彼らが走っているのを見たことはありませんから」

確かに剣道場からは威勢の良い気合いが聞こえてくる。

しかし、走っている姿は見たことがない。清吉はこっそり造士館を覗いているのだ。

「お前、藩校に入りたいか」

それには清吉は黙った。つまらぬことを聞いてしまったと清次郎は思った。徒士の身分で学問などとても手の届くものではなかつた。しかし、徒士とて同じ士分なのだ。論語の一つも読みたいと思うのは当然だ。小憎らしい弟だが、藩校に入れてやりたい、とその時、清次郎は強く思った。

二

安政二年五月十七日、碓氷峠の神主組頭曾根出羽が安中藩郡代官窪庭谷五郎からの呼び出しを受けて代官所にまかり越していた。

「碓氷峠からここまで七里を下がらせた。骨の折れること

な、と曾根は思う。そこは、坂本宿の手前で、熊野神社までまだ数里ある。これからは急な上り道を行かなければならない。たちまち道がぬかつて来た。しばらく大木の陰で様子を見たが、雨はとうとう土砂降りになった。

「禰宜の曾根様、どうぞお泊まり下さい」

と宿を貸す坂本の百姓がいた。ここで無理をすれば屋根のない山中で夜を明かすことになる。

「御厚意に甘えませう」

坂本村の百姓達は熊野神社の神主が泊まってくると言うので近在の人たちを集めた。雨の中、食い物と酒が持ち寄られ、期せずして宴会となった。

曾根は酒好きだった。酔いが進むと目出度い神々の朋来の話をし、乞われるままにお神楽の一振りを披露した。村人は喜んだ。まるで神様のお姿を見たような気分になり座は盛り上がった。曾根は明日のお役目を忘れて村人と興じた。

早朝、安中城下に大太鼓の音が鳴り響いた。早打ちだ。

「遠足だ」

気づいた藩士達は飛び起きた。藩士達が城門付近にぞくぞくと集まり出した。気まぐれな雨は明け方までにやんでいた。

五月の朝はまだ寒い。暖を取る火が三つたかれていた。

再び太鼓が打ち鳴らされた。

「さあ、雨は上がった。駆けるぞ。遠足は戦への備えじゃ。甲右衛門殿、貴殿は一陣じゃ。遠足道中の指揮差配を頼みますぞ」

と家老嘉門の声で城門が開かれた。甲右衛門が鷹揚にうなづく。

第一陣の十五人が、前へ出た。彼らの態は、「藩士としての体裁を保て」とふんどしは禁止され、白い股下には剣術柔術の稽古着である。足は山路を行くので足袋わらじを履いても良いことになった。だが、田川兄弟は裸足である。

ホラ貝が吹かれた。出発の合図だ。中山道の各休憩所でも良く見えるようにと色つきの狼煙が上げられた。

「よし。行け」

と殿の采配が振られた。

十五人が飛び出した。続いて第二陣の十五人が出た。今日の遠足は三十人で終わりである。

田川兄弟は第二陣にいた。第一陣の造士館組が直ちに先頭へ踊り出した。早い。ビチャビチャと泥を跳ね上げ、後続を断ち切る勢いで前進して行った。

第二陣で出発した清次郎と清吉兄弟は造士館組に挟まれていた。清吉がじっと前方を見詰めている。

と清吉が抜き去った。続いて清次郎が、

「御免」と前へ出た。その瞬間、吉住甲右衛門がズルッと道ばたにへたり込んだ。これは困った。清次郎にとって甲右衛門は杉奉行の最上司である。放っておく分けには行かなかった。

「御家老、私の肩に」

と助けに戻った。その時、りんとした声が響いた。

「父の足ではここまで。あなた様は早う遠足にお戻りなされ」

と一人の娘が木陰から急ぎ足で出て来た。誰だ。甲右衛門殿を父と呼ばれた。ならばこの方が藩内随一の美女、御家老の娘か、と清次郎は目を瞪る。

娘は身軽な格好をしている。白い手っ甲に脚絆で旅にも出ようとする姿だ。父親が心配で後を追って来ていたのか。あるいは先回りして待っていたのだ。

娘の姿は凛々しく美しい。女人が木の陰から出てくるなんて、まるで何かの化生ではないか。しかも、気品がある。清次郎は雷に打たれたように体を硬直させた。

「兄じゃ、何をしている。時が過ぎるぞ」

と清吉が前方で声を囁らす。

「あれは弟君か。しつかり者じゃのう。早う、行きなされ。助けに戻って来て下さったこと嬉しゅうございます。父にはちゃんと伝えます」

「兄じゃ、まだじゃ。もつとゆつくりじゃ」

と逸る清次郎に歩を早めさせない。

二人は腰に兵糧米をぶら下げている。中身は団子である。兄の清次郎は二つの竹筒を背にしている。二人はボロの野良着を着ている。いつ捨てても良いようにだ。だが、もう一枚、母があり合わせの布で作ってくれた仕事着を首に巻いている。古い野良着が汗を吸って気持ちが悪くなったらいつでも取り替えるつもりなのだ。

二人の狙いは一両出ると言われている二等賞金だ。一両あれば母に何か買ってやれると清次郎は思っている。一方、清吉は腹一杯、安中饅頭を食いたいと思っている。それには何とかして兄に一等を取らせなければならぬ。もしおのれが十二歳だとばれたら賞金はもらえないからだ。

城を出て半里も行かぬのに二陣の造士館組の一人が喘ぎ出した。ついに歩き始めた。二人はそれを黙って抜き去る。館生の何人かがにらみつけて来た。二人は二陣の先頭に出た。やがて第一陣のどん尻にいた御家老吉住甲右衛門に追いついた。甲右衛門は二人に気がつくこと、

「おう、清次郎か、わしは走ったぞ。見届けたであろうが」と声をかけて来た。それには清次郎が「はい」と答えるしかなかった。甲右衛門はもうよれよれで足が上がっていない。

「御免」

と甲右衛門の娘は言った。はじかれたように清次郎は街道に戻った。造士館組が追いついて来たからだ。

田川兄弟は第一組の先頭に並び中山道に入った。街道筋には大勢の見物人が出ている。薄日が差して来た。雨上がりでちよつと蒸す。水が要ると思った。

清次郎は後ろを振り向きたかった。左右を見てどうしても後方へ目をやりそうになる。後ろに甲右衛門の娘がついて来ているように思えたからだ。

「兄じゃ、よそ見をするな」

「うるさいぞ、お前は」

新緑の妙義山が見えて来た。目に緑の幕がかかったようだ。体が緑に洗われる。しかし、そんな景色など清次郎にはもうどうでも良くなっていた。一等で熊野神社に着きたい。そのまま一等で城に帰り着きたい。その姿を御家老の娘に見てもらいたい。そんな気持ちになっていた。

坂本宿が見えて来た。清吉が一番手に躍り出た。弟ごときに負けるものかと清次郎が追いあげた。しかし、清吉の方がはるかに早かった。清吉は急ぐ兄と並ぶと、

「まだ坂は続く。兄じゃは何を考えておいでか」

と兄の気が上がるのを制しに来た。清次郎が舌打ちしそくに弟を見る。本当にうるさい弟だ。

狼煙に気がついたのは坂本村の百姓達であった。雨で遠足は中止だろうと誰もが思っていた。しかし、遠足の一陣が出るに狼煙を上げるとかねてお知らせがあった。その煙が見えたのである。

「何と。狼煙が上がっております」

と坂本村の百姓が遠足が開始されたとの報を神主の曾根に伝えた。一大事である。このまま寝過ごしてしまえば大失態である。飛び起きて朝飯をすませたがもう一番手が上がってくるらしい。

仕方がない。神社まで一緒に走って割り札を渡すまでだ。城下で暮らす者よりよほどわしの方が足腰は達者じゃわい、と待ち受けた。

「何と先頭を来るのは童じゃ」

と誰かが声を上げた。その後を長身の男が追っている。

二人が近づいた。曾根は、

「熊野神社神主の曾根だ。そなた達は板倉様の家中の方々か」

と声をかけた。

「いかにも。我は田川清次郎。これは我が弟の清吉。熊野神社はまだか」

「まだも、まだも。もう二里はあるぞ」

二人は曾根達に礼を言い再び走り出した。今度は下りだ。めしうい坂を過ぎた。次は馬頭観音だ。

「兄じゃ、下りは足を取られやすい。気をつけろ」

と注意を飛ばす。

「分かっておる。山ならわしの方が良く知っておるわ」

と言いつ返す。左手に霧積温泉の湯煙か百姓が炭を焼くのか白い煙がたなびいている。煙を見ながら下って行く。あの白い煙は甲右衛門殿の娘の吐く息のように思えた。

沢がいくつかあった。昨晚の雨のせいでか水が濁って流れている。その沢に清吉が目を這わしている。清吉の動きがおかしい。

「清吉、疲れたか。ならば沢で足を冷やそうぞ」

と声をかけた。と、清吉は振り向きもせず谷を下って沢に降りて行く。

「お前、腹でも壊したか」

沢に降りて用を足してやるのだろうと思った。ところが違った。沢の水に入って草をかき分けている。そのうち、ヨシに足を取られたかアツと声を出して水量の増えている沢に沈んだ。

「どうした」

と清次郎は声をかけ、急いで沢に降りた。見ると清吉が沢の溜まりで浮いたり沈んだりしている。こいつは泳ぎが

「何と。誰ぞ、案内してくれ」

清次郎が息をつぎながら案内を乞うた。

「道は一本。ではわしが先導しよう」

と曾根が尻端折りをして駆けだした。清吉が後を追った。しかし、曾根の顎はすぐに上がった。山歩きと山駆けとは違う。並んだ清吉が、

「坊様、道はまっすぐだな」と聞く。

「そうだ。おい、わしは坊主ではないぞ。神主だ」

「大して変わらん」

とたちまち清吉が抜き去った。

一刻（二時間）後、清吉が神社にたどり着いた。次に清次郎。続いてもたもたと曾根出羽が着いた。

「みんな、この方々は板倉様の御家来だ。遠足の一番手だ。水を上げてくれ」

と喘ぎながら叫ぶように言った。曾根はそう言うのと神殿に尻を向けて座り込んだ。

田川兄弟が一番手と二番手の割り札をもらい中食に神社の力餅とお茶を出してもらった。これは美味かった。餅など正月以来、食っていない。清吉は二つも平らげた。

この頃になって造士館の館生が一人二人と到着し始めた。彼らは疲労で座敷に上がれなかった。

清次郎と弟の清吉は竹筒に水を一杯に満たした。やがて

できなかつたのだ。飛び込んで弟の首を引き上げた。

「何をしておる」

清吉は一時、咽せていたが、

「兄じゃ、ヨシの中だ。見ろ」

その時、ヒーッと泣き声が出た。ヨシの茂みの向こうに藁舟わらぶねが編んで浮かせてある。その中に赤子が乗せられていた。清次郎は何を見たか理解した。

「清吉、見てはならぬ。われらは何も見ておらぬ。よいか。こい」

と手を引いて溜まりから引き上げた。百姓が食べて行けぬから子を流れて捨てたのだ。あの雨だ。大川に流してくれると思っただろう。だが、雨は一晩でやんだ。沢の茂みに引つかかったのだ。

清次郎が清吉の手を引っ張って半町ほどを駆けた。と、

清吉が手をふりほどいた。

「兄じゃ、おれは戻る。放っては置けん」

「何を言うか。ばか者。これは放っておくものだ」

「死んでもよいのか。死んでも放っておくのか」

清吉は後方に向けて走り出した。

「……お前、どうする気だ。知らぬぞ。どんなお咎めがあるか」

と清次郎は言いながら、今度こそ、チツと舌打ちをした。赤子を連れて帰ったら母に目を剥かれ叱られるだろうにと

思う。だが、清吉の後を追った。

赤子は産まれて一月たらずだろ。木綿の産着に、精一杯の贅沢なのか赤い小さな甚平を着せてもらっていた。

「女の子だから沢に流したんだ。食べて行けぬから。この子に運があつたんだ。清吉が泣き声に気がつかなかつたら、今夜中に寒さで、この子は死んでしまう。なに、三人の貧乏も四人の貧乏も、そう変わるまい。さて、どこぞに子を産んだ女はいないか探して乳をもらってやろう」

と母のせいが空腹で泣く赤子をあやしなうながら言った。

清吉の表情がホッとしたのかなごんだ。家に帰り着くまで清次郎は、

「捨てろ、捨てろ」

と言いつつ続けた。しかし、清吉は抱きかかえて放さなかつた。小さい時、捨て猫の子を拾って来たことがあつた。その時、まだ生きていた父に叩かれた。叩かれて清吉は猫を放したが、父とは父が死ぬまで口をきかなかつた。強情な清吉を母も兄も嫌いではなかつた。むしろ弟に教えられることが多かつた。

その清吉がくしゃみをする。ずぶ濡れの中、着替えもせず帰って来たのだ。風邪を引かなければ良いが。

四

乏を馬鹿にされた悔しさは残った。

遠慮十日が五日間で終わった。

甲右衛門から早く仕事に戻れと催促が来たのだ。お役に戻る前に、今度は代官所から呼び出しがあつた。田川兄弟、母せい、そして赤子までが代官所の庭に呼ばれた。審問をしたのは代官窪庭谷五郎であつた。

「田川清次郎らに訊く。日頃、真面目に奉公しておるそちらが不届きにも、殿直々に命じられた遠足を途中で投げ出し、帰城もせなんだは如何なる所存か」

このことで十日間の遠慮を申し渡されている。それももう、すんだことではないか、と清次郎、清吉は怪訝な気持ちになる。

「恐れ入ってござります」

と清次郎は平伏した。しばらく口ごもっていたが、ぼそぼそと語り始めた。

「中山道、馬頭観音の辺りでしたか、沢で赤子の泣き声がし、弟が沢の茂みに飛び込みました。見ると乳飲み子が藁舟に乗せられておりました。弟が、このままでは死ぬから連れ帰る、と言って聞きませぬ。それがしは、見なかつたことにしよう、と弟を沢の深みから引き上げましたが、弟は赤子の泣き声を聞いてしまった以上、その場を去るわけには行かぬと」

案の定、清吉が翌日から熱を出して寝込んだ。

清次郎がお役に戻ったその日、藩より達しがあつた。

「田川清次郎に十日間の遠慮を命ず。遠足時、必ず城に戻れとの条を守らず無断で帰宅。この度の遠足は戦備のため、武士たるものいつも戦場にあると心得て奉公すべし。遅滞は不届き也」

「遠慮」とは「蟄居」、「閉門」、「逼塞」につぐ刑である。これで十日間、夜中以外、田川家の三人は外に出られなくなったのである。刑は軽いが不名誉なことだった。遠慮の間に遠足行事はすべて終わった。

遠慮三日目の夜、こっそり来客があつた。夜の来客は許されている。小藪村の庄屋だと名乗った。その庄屋が切り出した。

「話はなかつたことに」

清次郎に村の娘との縁談は、なかつたことにしてくれ、と言いに来たのだ。理由は藩から罰を受けた者の元へ嫁がすわけには行かないからだと言う。

話が終わると、小藪村の庄屋は、長屋の造りを見て鼻でせせら笑うような表情を見せた。あまりにみすばらしかつたからだ。その時、赤子の泣く声がした。と、したり顔でうなずくと庄屋は帰って行った。

清次郎は縁談が壊れてなぜかホッとしていた。だが、貧

「それで連れ帰ったか。なぜ届け出なかつたのか」

「これはお代官様」

と言いかけて清次郎はつまつた。赤子を拾つたと届け出れば、どんな咎が子を捨てた母親に下されるか、お代官様ならとくと御承知であろうにと思う。しかし、それを口には出せぬ。遅れた理由を言うしかなかつた。

「城まで帰る間、村々でもらい乳をして歩きました。気がつくとい日がつぷりと暮れておりました。それで帰城時刻に間に合いませんでした。その夜から、弟は風邪を引いたか熱を出して寝つきました。明日、弟の熱が引けば番所に届けよう、明後日は届けようと思うのですが、熱は引きませんでした。そのうち私めはお役に戻されてしまいました。それから遠足がすべて終わるのを待つて届け出ようと思つておりましたが、先に遠慮の沙汰が下されてしまいました」

「役に戻ったとは」

「杉枝の伐採です」

これらは代官の良く知っていることである。

田川の家のことは何もかも調べた上で訊いている。調べとはそう言うものだと一つ一つ読み上げるようにして代官窪庭は訊いた。

「うむ。それで赤子は誰が面倒を見ておる」

「ここにいる我が母が見ております」

「そなたの母では赤子の世話は大変じゃろう。第一もう乳は出んじやろう」

「隣近所を回って乳をもらいに歩いております」

代官は何度もうなずいた。そして、

「どうじゃ、その赤子、実の母親に返してやる気はないか」と聞いた。

「母親と言われますか」

「いかにも。名を聞かず返してやってくれぬか」

その時まで平伏していた清吉が顔を上げた。

「いやだ。できん。そんなことでできん。子を捨てる母に子を返しても、また苦しくなったら、おのれが生きるために子を捨てる。そうに決まってる。おらの妹にしたんだ。そのため、黙っておらたちは遠慮なんて、つまらねえ罰を受け入れたんだ」

と叫ぶように言った。

清次郎が弟を黙らせようと弟の頬を叩いた。それを止め代官が、

「その方、清吉と言ったな。よう言うた。その言葉、この子の母に聞かせたいのう」

と後ろを振り向いた。と、その時、赤子がヒーツと泣いた。腹が減っている。乳が欲しいのだ。

「子が乳を欲しがって泣いておる。どうするか」

と代官が代官所の裏に向かって大声を出した。そのとた

あった。代官は清吉を叱り飛ばすかと思った。だが、清吉の肩を掴み、

「うん、見に行け。そして泊まって来い」

と清吉をゆさぶった。

遠足の始末が殿に報告された。遠足は十九日から二十七日まで数次行われ、参加者は五十歳以下の藩士で合計九十五名であった、と安中藩史に記録されている。

「兄は一等になれず褒賞金はなし。弟は群を抜いて早い足をして出たが出場資格なしで走り損。その二人が間引きの子を拾って来おった。先々代公や父君が聞かれたら涙されるだろうのう。遠足は有意義であった」

勝明公は家老嘉門の報告を聞きながらそう言われた。

「兄を徒士から杉奉行配下の目付にしてやりとうございませ。今まで杉枝の伐採などでよう働いた徒士にございます。それに弟は造士館に入りたいと申します。で、殿の御宰領で免費にしてくださいたく」

「嘉門、そちはもうその弟を造士館へ入れたのであろう」

「はい」

「そちはやるのが早いもの。それで甲右衛門はどうしておる」

「大恥をかいた、面目を立てる、と次の遠足に備え毎日、土手を走っておるそうでございます」

ん、代官所の木戸がガラリと開いた。いきなり若い女が現れた。と、女は母のせいに頭を下げ手を合わせると、バツと胸をはだけ、おのれの脹れあがった乳房をむきだしにした。おおつ、と母は手にある子を渡してやった。子は乳房にむしゃぶりついた。ゴクゴクと飲み出した。子が乳を飲む姿に女は、

「わしが悪かった」

と辺りはばかり大声を上げて泣いた。

三人は代官屋敷から放免された。

「十日間の遠慮」はなかったことになった。これで罪は晴れた。しかし、兄弟二人は謹厳な面持ちで歩き出した。腹一杯乳を吸った赤子が満足そうにゲップをする様子を見て、実の母親にはとてもかなわぬ、と思ったのである。母は笑って、

「お前達も、あんだったよ」

と言った。これでやつと気がなごんだ。しかし、代官所を出る時、清吉は振り返って代官窪庭谷五郎に、

「お代官様、おらやっぱり忘れねえ。おらに妹がいたってこと。来年の遠足は、おらに出る資格がある。きつと一等で峠まで駆ける。その時、妹を見に行く。妹の家に一晚泊まってくる。それでも十日間の遠慮にするか」

と聞いた。十日間の遠慮に対する清吉の精一杯の抗議で

殿は大きくうなずかれ、

「次の杉奉行は、杉林を走って見回れる者にさせる、とわしが言っておると言うてやれ」

と愉快そうに笑われた。

この時をもつて遠足の催しは終わった。十月に江戸で大地震が起きたためである。材木の需要が高まり杉の値が高騰した。安中は杉の出荷地として江戸に近い。安中藩に要請があいついだ。安中藩は杉の積み出しにかかりきりになった。

杉奉行配下になった田川清次郎は良く働いた。若いだけあって精力的だった。やがて杉材一切をとりしきるようになった。

造士館に遅い入学をすませた弟の清吉は、最初こそ上級藩士の子弟から苛められていたが、剣術に活路を見いだすと苛めた相手をボンボンと打ち負かし始めた。次第に一目を置かれるようになった。兄弟の口げんかは相変わらずだった。だが、田川家に新しい風が吹き始めたのを誰よりも二人の母が感じとっていた。

安政四年、勝明公が逝去された。安中藩藩主が勝明公の弟、勝股公に代わると、遠足の儀はもう人々の口の上らなくなつた。日本を取り巻く情勢が緊迫し始め、諸外国の船が日本近海に出没し出したのである。これで遠足どころの

第7回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

主旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らしめ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る（3篇の場合まとめて送付のこと / 添付別紙は全体に対して1枚のみでよい）。

応募資格●不問

応募規定●

一篇は100行以内(原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格)。応募審査料1000円を郵便為替(何も記入しない)などで同封のこと。

ワープロ原稿はA4用紙を横に縦記入で用い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門(2011年度第7回現代詩賞応募作品と明記のこと)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)

⑤〒(郵便番号は必ず明記のこと / ないものは失格)住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。

⑨応募審査料1000円を郵便為替などで同封。外国からは11USドル。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと(コピー送付が望ましい)。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円(2名の場合は5万円)

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品

選考委員●嶋岡辰・松尾真由美・五十嵐勉(他の選考委員が加わることもあり)

締切●2011年5月31日(当日消印有効)

発表●1次予選通過作品は2011年9月末発売の「文芸思潮」42号に発表。

受賞発表・作品掲載は11月末発売の43号「文芸思潮」ウェブ、およびインターネットに発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂の響きを期待しています。

※ 恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

騒ぎではなくなつた。

その頃、城下近くの杉林に女人が現れるようになった。「誰だ、あれは」

杉林にいる男はみんな騒いだ。家老吉住甲右衛門の娘である。娘は時々、父に中食を届けに来るのだ。杉林に立たれると清楚な面立ちがいつそう映えて美しかった。やがて娘は忙しく働く清次郎をじっと見守るようになった。

「甲右衛門殿、お嬢様がおいでです」が次第に、「清次郎、お嬢様がお越しだぞ」

と変わるのにはかからなかった。お嬢様がお越しの日、いつも杉林にのどかな風が吹いていた。

これより安中藩は、維新を迎えるまでのしばらくは平和な時を過ごす。安中藩藩史に田川兄弟がどうなったかは書かれていない。あるのは杉出荷時の詳細な記録だけである。

受賞の言葉

龍造寺 信

ただただ、ありがとうございます、の一言です。物書きが読んでもらえなくなつたらお終いです。何の偏見もなく、良い作品を探しておられる編集者に巡り会いたい。そして読んでもらいたい。それが日頃の強い望みでした。願いがかないました。嬉しい限りです。

龍造寺 信

りゅうぞうじ しん

本名 馬場信浩

1941 大阪生まれ

明治大学文学部演劇科中退

78 「くすぶりの龍」で光文社第一回エンターテイメント小説大賞受賞

この秋よりテレビ朝日「23時ショー」の司会を一年間、担当

主著「やらいでか」(光文社)、「落ちこぼれ軍団の奇蹟」(光文社/TVドラマ「スクール☆ウォーズ」の原作)、「テニスちゃっかり上達法」(講談社)、「栄光のノーサイド」(文春)、「スクール・ウォーズ」(光文社文庫)、「禁色の波光」(光風社)他

85 「贅沢な凶器」推理作家協会賞短編部門ノミネート

92 「アメリカ・アイス」推理作家協会賞短編部門ノミネート

94 「カミング・ナイト」世界映画ストーリーコンクール特別賞

2008 筆名を龍造寺 信と改め「へちま侍」「御鷹様侍」「じらくり侍」など時代小説を小説宝石に発表

